

旨となす。従つて一物を見ないのを名づけて見道とし、一物を行せないのを名づけて行道となす。故に『六祖壇經』には、凡愚は自性を了せず、身中の西方を知らず、東方にして西を願ふ。悟人は在處一種なりと云ふ。然れども這般の一面に偏して不可得を失するは亦是れ禪意に非ずとなす。故に宗願禪師は二十六行の頌を作つて、人問ふ、禪家の宗門は萬事忘す、既に能く極樂を超ゆ、何ぞ必ずしも西方に往かんと。却て禪家の語を聽くに、西方はこれ本郷なり、馬鳴親しく訓誨し、龍樹亦稱揚す。娑婆の苦を語る勿れ、娑婆の苦は人を殺す。須らく極樂に登るべし。歸路沈吟する勿れ」と指讀してゐる。

## 六 眞言宗の阿彌陀佛觀

眞言宗にあつては、佛身名號國土等に於て皆四重祕釋の意をもつて觀念修行をなす。仍てその四重釋に依れば、一に彌陀佛は昔因位にある時、初めて無諍念王となり、世自在王佛の所に於て無上道心を發し、四十八願を建て、其願を果して成佛し彌陀と名づく。これ『悲華經』及び『雙卷經』の所說にして淺略であるとし。二に此彌陀は大日法身の普門萬德の中、金剛五智妙觀察智、胎藏八葉一切衆生證菩提門

の德、三世十方諸佛の說法斷疑の別德を主として、是れ兩部大經の所說にして深祕となすもの、三に此彌陀佛は獨り妙觀察智の佛體たるばかりでなく、實にこれ大日法身三世常住の慧命五智の圓滿具足せる法身である。これを無量壽と云ふ。故に彌陀即大日、一門即普門である。是れ祕中深祕であるとなす。四に此彌陀佛は即ち一切衆生の色心實相、性淨圓明平等の智身である。所謂衆生八瓣の心蓮、即ち彌陀三點の漫多羅は無明淤泥に淪むと雖染にあらず、始覺日光を開くと雖生にあらず、顯にあらず、三際不變萬德凝然である。之れを祕々中深祕となすといふてゐる。

次に密教にあつては金胎兩部の曼荼羅をもつて諸尊を示し、その名稱並に位置も兩部に依て異なる。則ち金剛界にあつては、西方彌陀如來或は觀自在王如來といひ、胎藏界にあつては西方無量壽如來といふ。その位置は金剛界にあつては、五大月輪があつて、其中輪(大日)の西方の月輪の中臺に金色にして三摩地の印を結ぶものが即ち阿彌陀佛であつて、四方に四菩薩を配す。其前方は金剛法菩薩、左方は金剛利菩薩、右方は金剛因菩薩、後方は金剛語菩薩である。かやうに西方阿彌陀如來の周圍に四菩薩を配するは、蓮華部智慧門の上に四德を標するのである。即ち



法菩薩は佛法を衆生に與へて成佛せしむる徳であり、是れ佛法の體である。利菩薩は智慧の利劍を衆生に與へ、因菩薩は衆生の爲に說法すべき因徳であり、語菩薩は正しく說法するの徳である。次に胎藏界に於ける阿彌陀佛の位置は、中臺八葉院の西葉にあつて、赤金色入定の相を示し、目稍閉ぢ下方を視る狀をなす。是れ即ち西北隅の觀自在菩薩との因果關係を示すのである。

斯くの如く彌陀は金胎兩部共に大日如來の西方に位し、西方成菩提の徳を表示する。次に彌陀の種子、三摩耶形、印相並びに尊容等に就て記すべきであるが、今は略す。詳細は慧林の『阿彌陀祕訣』、惠淨の『直言念佛集』、覺鏝の『阿彌陀祕釋』等に出てゐる。

### 七 融通念佛宗の阿彌陀觀

融通念佛宗にあつては、彌陀は應化身、他受用身、自受用身、自性身の四身を是足して常寂光土に在る清淨法身であるとしてゐる。故に妙色、妙身分限なく、一一の相好虚空と等しと。若しその自境界を論すれば、果分不可説であり、その機感を論ずれば、因分可説であるけれども、一大法身にして、自己心中を離れず全く性具の本佛であるとなすのである。

### 八 淨土門の阿彌陀佛觀

淨土門にあつては、先づ曇鸞は『往生論註』に、諸佛菩薩言通意別にして彌陀を意味すに二種の法身有り。一には法性法身、二には方便法身なり。法性法身に由りて方便法身を生じ、方便法身に由りて法性法身を出す。此二法身は異にして分つべからず、一にして同すべからず。是の故に廣略相入して統ぬるに法の名を以てす〔中略〕法身は無相なり、無相の故に能く相ならざるなし。是の故に相好莊嚴即法身なりと。二種法身を以て彌陀佛身を論じて、四十八願の清淨願心によつて莊嚴せられたる廣略相入の清淨佛身即ち二種法身が彌陀佛身であるとなす。次に道綽は『安樂集』に『大乘同性經』に依つて、彌陀報身の説をなし、善導は『觀經疏』に『大乘同性經』・『無量壽經』並に『觀經』等に依つて道綽の説を受けて更に論旨を進めて、彌陀は願心に酬報したる報身であるとの義を確立したのである。爾來淨土門流にあつては、彌陀報身説を奉じて未だ曾て違背せぬのであるが、日本に來つて、淨土教の分派するともに、その所詮を異にするものがある。



鎮西派にあつては、聖光は『淨土宗要集』に善導の説を祖述し報身説を主張し、『觀經』所説の六十萬億那由陀恆河沙由旬の彌陀を以て直ちに眞報身となし、良忠は『傳通記』等に善導の報身の義を成立したる理由に就いて『大乘同性經』の説を正證となし、『無量壽經』『觀經』の説を助證となす。而して四十八願酬因に就ては酬因必ずしも報に限らぬが、報の義親しく、殊に願中には光壽二無量の願があつて、これ即ち報身を願するものであるとなす。故に酬因亦報身の義を成ずるのである。而して報身に自受用、他受用の二身ある中、良忠は『無性攝論』中の西方極樂他受用土の文、及び懷感の『群疑論』に、凡夫佛力によつて他受用報土に往生を得るの文を引いて他受用身となす。それについて門下に於て、因願酬報の身は、直ちに他受用報身となすか、自受用報身にして他受用報身を現じたものとなすかについて異論があるが、大體に於て、現在西方の身を他受用身となすことに於ては一致する。而して此佛身は願力を以て衆生微少の因を攝して得生せしむるのである。其因は諸行であつても又は念佛であつてもかまはないが、機の修功は千差萬別であるから、生後感見の佛身も亦一様でなく、九品の差別があるけれども、報身であることには變りがないといつてゐる。

西山派にあつては、證空の『定善義他筆抄』又は『安心抄』に依れば、阿彌陀佛は願酬因の報身にして、その願は念佛衆生攝取不捨であるから、法界念佛の衆生を體に得て正覺を成せるものであり、従つて彌陀の正覺は法界に遍する法界身であるとす。故に善導が『玄義分』に無量壽を釋して、歸命無量壽覺と云ふのは、無量壽の阿彌陀に歸命の南無を具足するからであり、此阿彌陀佛であるから、佛體直ちに衆生往生の行體と云ふべきであると。次に若し廣く一切諸佛に對して彌陀の位置を定むる時は、一切諸佛は智門を掌り、彌陀は悲門を掌る。而して凡夫出離の要道は偏に悲門にあるから、諸佛は等しく彌陀を讚して、これに歸せしむるとす。尙ほ西谷流、淨音の『三十箇條口訣』、行觀の『觀經疏私記』等の意に依れば、更に之を祖述して、一切諸佛の正覺に自覺と覺他とあつて、自覺は總願成就にして、覺他は別願成就である。而して彌陀は諸佛の總別二願を總願に屬して、其上に四十八の別願を起す、而も別願は總願を全うするから自覺を全うしたる覺他、通の三身を全うしたる別の一報身を感じ、覺他の極まれる佛となる。故に南無阿彌陀佛の名號も單に萬德所歸と云はるゝ時は通三身内の名號であり、衆生往生の行體と云はるゝ時は一報身の義である。斯くの如く彌陀覺他の徳の成じたる時、諸佛覺他の徳を等



しく成ずるから、三世諸佛彌陀に依つて正覺を成ずるといはるるのである。されば覺行の窮滿は獨り彌陀に於て見るべく、最初海徳如來から今時の釋迦佛に至るまで、悉く此彌陀に歸して正覺を成せないものはないとなすのである。斯く西山派の彌陀報身説は通途の報身と其義を異にしてゐる。

時宗にあつては、時宗は西山派から分出したものであるから、すべての義が相近いもののやうである。阿彌陀佛身に就ては、託阿の『器朴論』に「當流相傳の一義は、彌陀を以て自受用身とす。既に受用智慧身阿彌陀如來と云ふ。自他二身とは悲智の二なり。智慧身を以て自受用の義とす。應に知るべし、別因正覺の佛を自受用身とするも、濟度衆生何んの妨あらんや」と。自受用法身説を主張してゐる。詳細は『器朴論』に出づ。

眞宗にあつては、『教行信證』、『愚禿鈔』等に詳説す。『愚禿鈔』に説く四身(法身報身、應身化身)の判は通途に準ずるものであり、『眞佛土卷』と『化身土卷』に明す所の二身(眞實の報身、方便の化身)の判は別途の義である。就中、眞實報身といふのは衆生往生を全うして(第十八願)、佛の覺體(第十二、第十三の願)を成せんとするの願心に酬報して成じたるものであり、化身とは衆生の機根未熟にして、直ちに佛の本願を信

ずることが出來ず、定散自力の行に因つて往生せんとする者の爲に、報身化を垂れて機感に應ずるものである。斯く二身あつても、總該すれば共に報身である。故に『眞佛土卷』に「眞假皆是れ大悲の願海に酬報せり。故に知りぬ報佛土なり」と曰ふ。而して其眞實の佛身に就て法性法身と方便法身とを立つ、これは『論註』の説を承けたものである。『唯信鈔文意』に此二身の義を詳釋して「法性法身とまうすは、いろもなし、かたちもまします。しかればこゝろもおよばず、ことばもたえたり。この一如よりかたちをあらはして、方便法身とまうす。その御すがたに、法藏比丘となりのたまひて、不可思議の四十八の大誓願をおこしあらはしたまふなり。この誓願のなかに、光明無量の本願、壽命無量の弘誓を本としてあらはれたまへる御かたちを、世親菩薩は盡十方無碍光如來となづけ、たてまつりたまへり。この如來すなはち誓願の業因にむくいたまひて報身如來とまうすなり。すなはち阿彌陀如來とまうすなり。報といふはたねにむくいたるゆゑなり。この報身より應化等の無量無數の身をあらはして、微塵世界に無碍の智慧光をはなたしめたまふゆゑに、盡十方無礙光佛とまうす」とある。これを要するに、西方淨土の彌陀は別願酬報の報身にして、方便法身とも云はれ、久遠の眞證たる法性法身を全うして諸佛



三身の本體となり、未熟の機の爲には報の中に化身を現じ、又諸佛の應化身と等しく化身を現することがあるとした。而して西方淨土報身の彌陀は、衆生攝取の別願に酬報するから、光壽二無量の覺體を大悲攝化の本とし、南無阿彌陀佛の名號に願行具足し、以て衆生に廻向し、衆生を攝して報佛土に引入したまふのである。

—佛敎大字彙にまとめられたものを更に、繼成師の説林を参考してみたものである。—

### 第五章 淨土眞宗學匠諸註錄概観

一 阿彌陀經義疏記引文 二卷 峻 諦 二二三四  
二三八一

戒度の『佛說阿彌陀經義疏聞持記』の研究資料を提供しようとして、峻諦師が精根を打こんだ成果である。撰者戒度の居所、四明龍山足菴についても、地誌、事傳、山記等を引用して、驚くべき該博なる資料を提供してゐる。釋文文辭の釋註に至つても博く漢籍詩文にわたり、いふまでもなく、經論釋の引用についても、その構想の威容には目を瞠るものがある。

二 阿彌陀經義要 四卷 大谷派 惠 空 二二〇四  
二三八一

玄辨十一條を分別してゐる。『義要』は眞宗後學の指針として讃仰されたものである。依つてその玄辨の全條を擧げてみよう。

一、本朝將來の事の條下に於て、『帝王本記』欽明帝十三年冬十月百濟國調貢乃至則淨土正依經論等斯時來至と——蓋しこの所傳は直ちに信用出来ないものであらう——又慈覺大師傳來によつて正依の經論別來されたものであると傳へてゐる。

二、淨土正依の經の事の條下に於ては西方往生を説いた經論まことに多い『十疑論』には十餘部の經論を擧げ、迦才の『淨土論』には十二經七論を所依とし、『樂邦文類』には四十六處の經文六部の論を出してゐる。僧肇の『疏』、慈恩の『要決』には四部の經を所依とした。三經に鼓音聲經を加へ、『往生要集』の極樂證據門その外、大藏の目錄に於ても、三經と諸經と一列にしてはつきりとした傍正の判がなかつたが、これらに對して、一宗の正依を三經と定められたことは獨り黒谷の所判である。黒谷は釋家の『定善義』三緣釋『散善義』二種深信釋、並びに『法華玄讚』上等によつたものであつて、『選擇集』に四箇の例を出して三部といふ目を成せられた。



以來淨土鎮西西山の諸師——幸西『稱佛記』同『略料簡』、聖覺『願釋』、西山の『要釋』、行觀の『秘抄』等——悉く黒谷を繼いでゐると述べてゐる。

三、三經說時の事の條下に於ては、古師の説を總覽して、二義とした。即ち肇公の『疏』に道理に準せば大前觀後事を以て推せば觀前大後なりとある。龍興、璟興は第二義により、玄一は第一義を存して璟興の義を破してゐる。終南、黒谷は、大觀、小次第を採用せられたものであらう。本願の宗源は初説に當り觀門の方便は次説に當り、捨權證實の義は後説に當る。——この釋先覺の文辭を全く借りたものである——蓋し小經を第三時とすることは結經の義から終りとするのである。これは時年によるのではなくてたゞ教の次第についていつたものであつて、かの法華三部中、無量義を開經とし、普賢觀を結經として開結二經を初後とするのと同意であると明に斷じた點はさすが惠空師である。

四、隱顯の事の條下に『化土卷』、依釋家之意。按無量壽觀經者。有顯彰隱密義と、また『三經大綱雖有顯彰隱密之義。彰信心爲能入。』とある。宗祖は、終南の觀經釋によられたものである。終南の釋義を窺ふと、『玄義』釋名門の文『序分義』釋我今樂生の文『定善義』釋第七觀の文などである。更に宗祖は小經もまた觀經に準知

して隱顯の義あるべしとて、『化土卷』に「言顯者、經家嫌貶一切諸行少善、開示善本眞門、勵自利一心、勸難思往生、是以經說多善根多功德多福德、因緣乃至言彰者、彰眞實難信之法、乃至開隱彰義也」と示された。蓋し隱顯の義はたゞに終南のみならず、『安樂集』元曉の『大經宗要』黒谷『漢語燈』第三等にもはつきり述べられてゐることであるといはれてゐる。

五、今經の釋類の事の條下に本經の註疏選述者について僧肇以降天台、善導、元曉、慈恩、元傳、圓測、玄一、慈藏、智圓、惠淨、仁岳、元照、戒度、用欽、智央、錢塘、希深、長水、法久、懷感、大賢、大佑、株宏、性澄、智旭、源信、永觀、永範、黒谷、凝然、西譽、堯惠等を列擧し、異譯『稱讚淨土經』疏には靖邁、大賢、慈恩等をあげてゐる。その他『捨要鈔』等諸家の私記は具にすることが出来ぬ。これらは『長西錄』、『雜集錄』、『私抄』等によつて檢したものであつて、凡そ五十三部七十四卷である。就中、懷感の疏二卷眞僞未詳であり、僧肇の疏も眞僞定めがたい。永範の『要記』は當經の講義ではなく、特殊なものである。天台の『義記』も眞僞は古來の宿題である。と批判してゐる。この條は堯慧の『私集鈔』の傳寫であらう。

六、讀誦の事の條下には古來讀誦用として本經を最適なものとしたことを述べ



てゐる。

七、大意の事の條下に元曉の「兩尊出世之大意、四輩入道之要門、示淨土之可願、讚妙德之可歸」の文をあげ、黒谷並に西山の疏を引き、或は智證の釋をあげ、その大意を明示してゐる。

八、宗教の事、九、無問自說の事、十、出世本懷の事、十一、本願配合の事、以上四條は古來の義をよくまとめて後學の便に資したものである。本書は惠空師の組織力と明敏な學識とを遺憾なく表現した高著であることは何人も異論をさしはさまないだらう。

### 三 阿彌陀經聞記 一卷 惠空 同前

玄談に於て開卷最初に本經の結經論について三種の結經論を擧げてゐる。即ち、一は觀經の結である。二は三經の結經である。三は釋迦一代の結經であるとして、精密な所論を試みてゐる。次で本經讀誦について、宗體について、或は無問自說論など『義要』の詳釋を簡潔にしたものである。『義要』の意見は既に紹介すみだから省略することにする。

### 四 稱讚淨土經駕說 四卷 月空 二二三—二三八

『駕說』は月空の快心の作である。その序に、古來贊述の多くは什本に襲沓して、玄奘譯の章疏に至つてはきはめて少なきうらみがある。蓋し聖謨もとより洋々としてその玄淵をきはむることは至難のことではあるが、嘿し忍ぶに堪へずしてこゝに駕說の名をもつてその一端を窺ふものだといつてゐる。

經釋の便宜上七門を啓いて、教興、藏教、宗體、所被、傳譯、名題、正釋文義などをもつて詳釋してゐる。

教興の一門に於て、持名の法門は至圓極頓であり、大聖弘化の本懷である。されば一代の時教は持名法門の序分に當り、更に大觀二經の結論として無問自說し、直に弘願の本意に望め、更に出化の幽懷を闡き、餘善の方便を貶舍し、持名の眞信を勸持し、末法濁惡の衆生唯だ能く佛智を信受すれば即ち彼土に生じ、速疾に菩提を證得することを顯はすところに本經の教興があると示し、

第二判藏教門に於ては本經は専ら持名願生の勝因、成佛究竟の眞證を説て調伏對法の義趣、下乘修斷の道品を兼詮してないから經律論三藏中ではたゞ經藏であ



り、また菩薩藏中頓教の所收だとし、更に分教所攝を論すれば、鄔陀南の説であつて、隨自の法門であるとして、宗家先哲の證文を引用して巧にその消息を述べてゐる。

—宗家、靈芝、横川、雲棲—

第三宗體門に於ては、本經は如來本願爲宗、名號爲體をもつて宗體としてゐるが、觀小二經には義の隱顯に隨て且くその別を立て、觀經は第十九の本願を宗と爲し、本經は第二十の本願を宗と爲すとして、宗祖の化卷の文を引證してゐる。蓋し隱顯の宗とするところはその願は且くこれ別ではあるが、その徳は總じて佛に歸すべきであるから名號爲體といふべきである。而して隱顯もとより二而不二だと明判を與へてゐる。

第四所被門に於ては、經釋の明文により、常沒者に於ける利濟を專にすることを述べてゐる。

第五傳譯門に於て、本經傳譯に三代あること『通讚』の彌陀偈頌一紙を加へて四譯としてゐること、開元錄の宋譯未見の記録まで擧げてゐる。

第六解題門には、正しく解題と、譯人について適切な解答を與へてゐる。經題の原由によれば「稱讚不可思議佛土功德一切諸佛攝受法門」といふべきものを譯

主はその旨を得て省略したものだとして、上の四字は法に屬すべきであつて、彼土の二報莊嚴及び稱名往生はひとへに彌陀大悲の願力不可思議功德の成就し玉ふところを稱揚し讚歎するからであるとし、什譯舊經題の正を擧げて依を攝するのとは反對に、并譯經題は依を擧げて正を收むるから淨土といつたもので、もとより影互の意であるから淨土は但に依報に局つて解釋すべきでないと警告してゐる。下の三字は機に約したものであつて、即ちこの法を聞て深く信解を生ずる者は、諸聖の冥加攝受によつて捨てられず定んで彼の土に生じて菩提を證することができると示してゐる。なほ譯者玄奘三藏については『大慈恩寺三藏法師傳』並に『續高僧傳』等によつてその生涯を述べてゐる。

第七入文解釋に至つて、きはめてゆたかな佛敎學的智識をもつて縦横に論斷して、胸のすくやうな明判をところ／＼に加へてゐる。駕説の前に駕説なく、駕説の後にまた駕説なしとまでいひたいほどの名著である。

## 五 佛說阿彌陀經聖淨決 二卷 法霖

二三五三  
二四〇一

その組織については懸説分と解釋分とを大段とし、懸説分を更に十門分別して、



先づ聖淨二門について萬丈の氣焰をあげてゐる。後學に膾炙された三同七異をもつて二門を分別してゐる。その三同とは、一、理性本具、二、果海融即、三、諸法齊名であり、その七異とは、一、自力他力、二、斷惑不斷惑、三、超出橫豎、四、名通義別、五、往生成佛、六、能詮所詮、七、凡下入報である。

三同の問題については、その卓識を敬慕するに吝でないが、同門の智暹師からは手きびしい批評をうけて、あまりに論理が豁達であつて圓理(天台教義)を愛誦しすぎた結果聖淨混同の傾向があつたといはれた。或はこの批評のあたるところがあるかも知れぬが、そこが、却て法霖師の長所でもあつたと思ふ。七異の中超出橫豎の門に於て、震旦の師は横出あることを知りて、横超を知らず藕益ひとり横超不思議の言あり、恐らくは吾祖の『本書』に看るか怪むべし等に至つて、史實の討究の點に於てはともかくとして、その大膽な發表は師の識見を仰がしめるものがある。その第六能詮所詮の條下に於ける解説はあまりにも宗乘的な獨斷に過ぎる。かうした筆法が後世の眞宗學界にかなり影響を與へてゐると思ふ。

次に古師の謬解を破する一段に於ては、先づ天台の謬解を指摘してゐるが整然たる論理の進め方は他の眞似のできないところであらう。次で元曉は雜華の英

だと評したが、菩提心を正業とし持名を助業となすことは全くの謬解であるのみならず、本朝明惠の如きもその謬れる影響を承けた典型的なものである。靈芝、雲棲に至つては持名の多善根に徹せざるものと評破した。次で説時の次第について、古來の先哲の間に觀經の法華同時説を採用するものもあるが、この所論は充全ではないと評し、實は説時次第にかゝはらざるものと判じてゐる、強いて説時の次第を論ずれば、大經は先にあつて、觀經これにつぎ小經は最後である。『口傳鈔』に「大經は法の眞實をあかし機は權機なり、觀經は機の眞實をあかし法は權なり、今經は機法兩合して諸佛證誠を説きたまふがゆゑに今經をもつて一代結經となす、等祖釋をひいて縦横に論斷してゐる。

第八部宗體を定むる條項に於ては、師独自の論斷がある。即ち附屬流通をもつて宗と爲し、名號をもつて經體とすと判じた。この論斷に至るまで問答往復して、詳細にそのよつて來るところを辯證してゐるが、その論理のさえと學識の豊かさに自ら頭がさがる。

眞宗叢書に編みこまれた聖淨決は全文和譯してあり、宗體論の下、二行ほど原本に見出されぬ文句を添加してゐる。そのため却つて初學のものをまどはすことなきかを懸念して、叢書編纂に深い因縁をもつ學者にたゞしたところ、聖淨決の流布本に異



本があつて、ことにまた、その異本は法雲師の住所に秘藏されてゐたから、これを有力な資料として編纂者の意見により、その書入れを流布本に挿入して和譯したものらしいことであつた。蓋しその事實は首肯できるとしてもなほ疑問はのこる。

六 佛說阿彌陀經錄 一卷 僧 樸 二二七九  
二四二二

師の生涯は決して永くはなかつた。法如宗主その溘焉入寂に際して、慟哭せられて即日陳善院の諡を賜ふたと傳へられてゐる。學徳秀でたる師は昨夢廬に病んで、遇ふ人ごとに警策を懇にしたといふことである。著書頗る多く、『小經陳善錄』はそのすぐれたものであつた。

本録は始終を通じて、學的功績といふよりは、寧ろ宗教的にくめどもつきぬ味のあることに特徴がある。これは全く師の人格的な香り高いものがはつきり示されてゐるのであらう。

本録は玄談として大意と來由とをあかしてゐる。そのうち、來由の段に於てはさすがに師の學的面影が窺はれる。

基法師の『通贊』によつて、本經の起由は三輪を破せんがためであることを特に高調してゐる。或はその無常輪に於て、『仁王經』『摩訶止觀』等により、無常につい

ての三義をあげ、念念壞滅無常、和合離散無常、畢竟如是無常、等適切な警策を與へ、或は不淨輪に於て『智度論』『圓覺經』を引用して切々と訓誡し、或は苦輪に於て『法句經』の三苦八苦十苦の教誡を引用してもつて、三界は衆苦充滿の外なきことを知らしめてゐる。

その入文解釋たるや、きはめて手ぎはよく簡にして要を得たものである。

なほ師に『法事讚甄解』の著がある。これにはよほど學的工事が施されてゐる。

『陳善錄』を熟讀して、なにかしら、慄然たるものがある。こゝにぎこちない研究成果を求めたものが、實は切々たる訓誡と熾烈なる警策とを與へられた。

七 法事讚甄解 七卷 僧 樸 同前

第五卷に『駕說』の説を依用し玄談として六門に分別を試みてゐる。

一、明教興 二、判藏教 三、明宗體 四、示所被 五、辨傳譯 六、釋經名である。

第一明教興門に於て、二重の通別を立てた、初重の通別は靈芝の如く通は一代、別は阿彌陀經である。第二重は古今の他師の未曾知の深義であつて淨土眞宗不共の極致である。その通とは、三經に通するので、眞實弘願、俱に是が超過一代の妙莊



嚴路であり、釋尊出世の最極本懷である。その別とは特に阿彌陀經に於ける教興を論するのであつて、凡そ五義を開顯することが出来る。

- 一、爲合說機法眞實故——依和讚口傳鈔
- 二、爲的示廢之極要故——依和讚
- 三、爲顯彰諸佛證誠故——依和讚
- 四、爲開示三佛同入妙旨故——依和讚
- 五、爲顯明本願成就故、而してその五由から更に三門を開いてゐる。即ち一、爲示三信即一心——依唯信文意
- 二、爲彰即得往生現益——依眞要鈔
- 三、爲明弘願難信之法——依唯信文意

判藏教門に於て本經は大乘修多羅中の無問自說經なりとの化土卷釋並びに一多證文釋を引證して、頓中の頓、眞中の眞、乘中の一乗と結歎してゐる。

宗體論に於ては、若し顯說につかば第二十願行信を以て宗と爲し、方便化身土難思往生を以て趣と爲すと論じ、若し隱彰の實義につけば、三經一致の義に約し選擇本願の行信を以て宗を爲し、眞實報土難思議往生を以て趣と爲すと論斷してゐる。『陳善錄』によつては、自ら頭の下がる僧樸師の面影を偲んだものが、更に『甄解』によつては、師の高邁な學識を讚仰せざるを得ないことになる。

八 阿彌陀經佩麟記 三卷 秦巖 二三七—二四三

玄談の七門は全く『駕說』を繼承してゐる。その體裁自ら智暹の『展持鈔』に似てゐる。就中、三經次序の問題については『弊帚錄』説を採用し、かの列衆中に迦留陀夷を載せてゐるところから阿彌陀經は法華觀經の後とすべきだとし、蓋し三經の説時は大體時に拘らざるをもつて正とすといふ所論をもそのまゝ共許せるものゝやうである。而して『同録』の説時次第の五義の中第一第二第五義は極成するが、第二第四兩義おだやかでないといふ評捨してゐる。

判藏教の一段は全く『駕說』の釋相を擴充したものであつて、その詳しき説明に過ぎぬ。その他の章門并に入文解釋については佩麟の名の示すやうに、きはめて謙虚に『駕說』『弊帚錄』の説を採用し、その擴充助釋につとめたやうである。

九 阿彌陀經略讚 二卷 大谷派慧然 二三五—二四二

教興、義宗、經題、入文解釋の組織をもつて簡潔に而も巧みに解釋を進めてゐる。その教興門に於ては、宗祖の『化身土卷』の指南により、更に『行文類』の指示によつて、本經の一乘圓滿頓出離法修多羅などについて、『大乘義章』『法華科註』の釋相を主として採用し、詳細にその解明につとめてゐる。



その義宗門に至つては、また『化身土卷』の指示を本とし、顯彰隱密について深い理解を示してゐる。或は華嚴宗の眞顯寄顯をあげ、天台宗の當分跨節、眞言、禪などの顯密二教、淺略深祕、權實について比較し、今家は正に宗家の釋相によつたものであることを示し、攝論宗の四意趣、俱舍法相の、顯密二宗、隨轉理門から、更に成唯識論の合糅譯にまで論及し、更に法華涅槃の經說を釋籤によつてあざやかに取扱ひ、遂に今家の正意を開闡して行文類、化卷の指南に歸し、選擇本願爲宗、金剛眞心爲最要こそ本經の義宗であると結成した。

その經題門には、説人差別について、五種説をもつて諸經のそれを統べ釋宗家の諸疏を指南として、大小經論の所説を引證評釋してゐる。

その入門解釋に至つては、廣く一切の經論釋にわたり、學識のゆたかであつたことに驚歎するほどある。ことに正因正業を選び不可思議功德の體を顯示すと標舉した一段に於て襄陽石刻經本についての研究に至つては、まことに後學の指針とすべきものである。

## 一〇 佛說阿彌陀經展持鈔 九卷

智暹

二三五〇  
二四二八

玄談ともいふべきものに七門を啓いてゐる。教興藏教、宗體、所被、傳譯、名題、入文解釋がそれである。この體裁は月窓師の『駕說』によつたものであらう。更に教興段に於ても『駕說』の名句妙文をそのまゝ引用してゐるが、次で問答を設けて『駕說』の所説を更に擴充してゐる。この問答こそはよく後學者の指針となつたものであつて、その眞價は充分認めらるべきである。

その三經說時次第に至つては、元祖『漢語燈』小經釋并に觀經釋によつて大觀小の次第とすることは今家の最要であることを高調してゐる。更に義類の差別については、小經は方等時の攝なりとして或は『法華玄義』により或は『五教章』によつてその點を巧に解説してゐる。次で指方立相、厭穢欣淨の法義について圓覺經と交渉づけて、聖道修行者のすべては念佛の宿善を行するものなりと論成してゐる。その他七門各々にわたつて問答往復して詳細に今家の眞意を開示されたが、その解説も内外聖淨の典籍をあさつて學識の廣いことを肯かせるに足るものがある。就中、第二卷宗體論については、霖師と意見を異にして、『駕說』に隨つて本願爲宗名號爲體の義を繼承してゐる。そして廣く支那釋家のそれらを紹介批評して、孤山は信願爲宗、實相爲體を主張し、性澄并に大祐は實相爲體、勸修行願爲宗と立



て、智旭は信願持名爲宗實相爲體と談じてゐるが、これらは台家教義に据つての所論であるために實相爲體をその中心點としたものである。元曉は依正二種清淨爲宗理事無礙爲體とし、株宏は依正清淨爲宗隨相等爲體と談じたが、この二人は華嚴系の學者であるから宗趣を開いて所詮爲宗を高調したものである。また、慈恩の『通讚』とか元照の所論についても同様に紹介批評を試みてゐる。

また、三經宗體隱顯同異の問題よりその他の問題并に入文解釋のすべては後代眞宗學者の指針となつたものであらう。

一一 小經淨眼録 二卷 義教

二三五四  
二四二八

玄談に綱要と解題と釋經文との三門を擧げ、その綱要の中、更に七門を開く、一、明淨教出世本懷 二、辨三經說時次第 三、辨隱顯 四、明宗體 五、明今經所被機 六、辨教主 七、辨今經無問自說がそれである。

上來先哲の組織に順するところが多いやうであるが、第一門は華嚴の經疏を引證してゐるところによると華嚴學の學者であつたとうなづける。第二門三經說時の次第門に於ては、更に四阿含經等を廣くあさつてゐるところから推して佛教

學的教養がゆたかであつたと思はれる。第三隱顯門に於ては實にあざやかに義文をさばいてゐることに敬意を表したい。第四宗體門は祖釋并に古哲の義を忠實に繼承してゐる。第七門には今經の無問自說より三經同一轍なることを顯示し給へるものだと力強く斷論せるところ師の眞面目を窺ふに足る。入文解釋段に至つては『駕說』『弊帚録』によれるところが多い。

師は若霖法霖師とその學系を異にしたやうで安定師の系嗣であつたと傳へられてゐる。蓋し聖淨問題については法霖氏に劣らぬ學的成果ををさめたものであつて、芳山師と協力して選述したところの『千五百條彈禪改』は實に『笑螂臂』と比肩すべきものである。

更に佛性論權實論などについても一家の識見をもつて、その間正確な佛教學的基調に立つて寛容な態度のうちに毅然たるものがあるやうである。師の學風は永に輝かしいものだと思ふ。

一二 佛說阿彌陀經弊帚録 三卷 慧鑑

二三五四  
二四一一

本録の組織は綱要と釋文義との二段になつてゐる。その綱要の中更に六門を



開いてゐる。即ち、一、辨正依三經序明三經次序、二、明説人教主、三、示受化機、四、判宗教差別、五、讚流通、四、廣解題名である。

就中三經次序についての依時依義の義はその時代の學者によつて、多く依憑されたやうである。迦留陀夷問題は先師の義を襲踏したものである。

舉所詮眞實難信之法——小大觀の次第

依從實開權之義——大小觀の次第

依從權歸實——觀小大の次第

更に、大觀小次第については五義を立てた。

一、化儀次第、二、據三誓偈、三、爲體用義、四、本願次序、五、機法權實であるとしたことはまことにたくみな説明である。本録一部にわたつてその組織の整つてゐることに於ては先哲をしのぐものがある。

本録に對して高田派慧忍の『明煥記』二卷の著がある。本録の出版について平かならずとしてこれを評破しようと試みたものである。

然るに本録の説人教主の一段にはかなりの獨斷があるやうで熟讀再三に及んでもどうも宗家并に祖家の釋相とはいくぶんのくひちがいがあるやうに思へる。

この問題こそ『明煥記』の所謂平かならずとした點であらう。

一三 佛説阿彌陀經甲午記 二卷

慧雲

二三九〇  
二四四一

その玄談に八門分別がある、一叙教興、二判分際、三明宗體、四示所被、五辨傳譯、六評末疏、七解名題、八釋經文であるが末疏優降を評して檢討の用意に便ならしめたいとて、支那の註疏中、法事讃を最要として推唱し、靈芝戒度は諸家に傑出してゐることを賞め、雲棲藕益はその亞者と評し、天台慈恩元曉僧肇淨覺等の諸家の註釋より、孤山に及び、本朝略記私記より更に下つて駕説弊帝聖淨決などたくみに評破して餘蘊なき點は、たしかに慧雲師の學的識見を示すものがある、而もきはめて簡潔に過ぎはよく適切な批評を加へたことに敬意を表したい。

叙教興門に於ても、通途と不共とを峻別して、通途に於ては靈芝と雲棲の説をあげ兩者を批判し、雲棲はその釋相は法華によつたので十門分別は實に廣詳ではあるが、經宗の問題にふれてゐないから靈芝のそれには遠く及ばないと判じてゐる。不共とは淨門の極致であるが、その中、更に通別を分別して、三部の經を叙するものと、特に本經を叙するものとに區別して、その點『駕説』の義を評取し、特に本經につ



いては、五由をあげ、一、爲合説機法故二、爲的示廢立故三、爲舒舌證誠故四、爲三佛同入故五、爲映顯大本故としてゐる。これは恐らく後代本經註釋に規範を與へたものといつてよからう。第二門以降前後六科はすべて『駕説』の釋相を襲踏したものである。蓋し第五傳譯門に至つては各經錄を熟覽して經錄研究者としての素質をも充分そなへてゐたことを示してゐる。第八入文解釋に至つては眞宗宗學の大御所たるの貫録を示してゐる。

一四 佛說阿彌陀經明煥記 二卷

高田派慧忍

二三六六  
二四四三

前序に環中謹題あり、呈上明煥記あり、これらによるに弊帚錄に對して嚴かに批判を加へ、その放失を匡正せんとしたもののやうである。

十門の玄談を置く。教起因緣門、教主分別門、藏乘部攝門、立教差別門、教所被機門、能詮教體門、所詮宗趣門、題目具略門、傳譯存亡門、入文解釋門はそれである。

就中、教主分別門に於て『弊帚錄』に對する批判を加へてゐるやうである。また藏乘部攝門に於ては十二部經問題について、先輩の所論よりも更にすぐれた學說を出して、師の學識卓見をよく示してゐる。またその第七所詮宗趣門に於ては祖

判により、總じて名號をもつて宗と爲し、果遂往生を趣と爲すところにあるとし、五對の義趣を述べてあるところは師の獨特の見解と見てよからう。入文解釋門の中『弊帚錄』の釋相を評破するところが多い。

蓋し一部通じて、文意暢達といふ點に缺けてゐるから、折角の念願もはつきり通じにくいらみがある。

一五 阿彌陀經受信錄 三卷

僧鎔

二三八三  
二四四三

僧樸師の門下に英才が雲の如くに集つたが、就中、僧樸師は僧鎔師の偉器をたへ、師資の關係を結ばず、客分として遇したやうである。僧樸師の臨終、すべてその所藏の祕籍を師に託したと傳へられてゐる。さればこそ、僧樸師の人格的感化を強くうけられたとみへて、『受信錄』一部からうける感觸は全く『陳善錄』のそれと相似通ふものがある。

『受信錄』の玄談に經典講義の用意を述べて、「以念佛知恩報德爲本意」といひ、淨土和讃卷首の二首をもつて、本經教興の體要とすべきだとし、從つて本經の宗體宗用もまたこの卷首の二首を出でないと高調してゐる。その間、自ら尊いものがない。



み出てゐる。

『起信論』について意想外な教誡がある。それは論の修行信心分に於て、四信五行を明示した後、若人専念西方極樂世界阿彌陀佛等」とあるが、この文は賢首の『義記』では觀經の立前らしく釋してゐるが、實は小經を指すものだらう、その次の勤修習得生住正定故とは觀經の心もちだらうが、念佛を勤めるには先づ小經から始めて觀經に及んだものだらうとの教誡である。もとよりかうした獨斷は論理的な研究からは許るされないかも知れず、またこの獨斷が眞宗學を禍したかも知れぬ、蓋しかうした獨斷の生れ出るところに眞宗學の特徴があるともいへる。

その玄義として釋題、釋宗、例科の三門の組織を立て、特に釋題の門に於て無問自說問題を重大に取扱つてゐる。無問自說の名目の典據を『法華玄義』の上に求めてゐるが、先哲の釋相とは稍々趣を異にした特異なものとして特に注意さるべきである。

次に釋宗の門に於ては、支那に於ける新舊兩譯家の宗體論を概觀し、宗家宗祖のそれに及んでゐる。かやうにして、師の宗學に至れば既に天台教學の釋相より胚胎したものだらうが、『非因非果』亦因亦果の釋相が吾が眞宗學のうちに完全に採用

されてその劃期的な組織が現出してきたやうである。

次に例科の門に於ては、廣く諸經論釋を資料として、周到な用意をもつて輝やかなしい功績を擧げてゐる。

一部を通じて『駕說』、『陳善錄』、『弊帚錄』を参考して、自說をあざやかに組織立てたやうである。

## 一六 小經護念錄 二卷

大谷派 慧琳

二三七五  
二四四九

龍谷圖書館所藏の本録は、もとより筆録者の責任ではあるが、講録としては體裁きはめて粗雑である。玄談らしいものを初に記録してゐるが、それが來意やら、判部教やらはつきりせず、全くの書きばなしであるために、慧琳講師のものとしては甚だしく敬意を失つてゐる憾がある。

宗體論はやゝ組織立てられてゐる。祖判には、以本願爲經體、以佛名號爲經宗とも、以護念爲經宗、以佛名號爲經體、以選擇本願爲經宗、以善本徳本爲經體、とありと紹介して、孤山の宗體に及び、それが祖判にも通ずるだらうと結んでゐる。次に題號釋は古來の義を襲踏してゐる。入文解釋は簡明に消釋してゐる。香月院は、『講義』



のうちに、理綱院の講説を不缺に聴記したことによつて、この『講義』をかいたと記録してゐるところから見ると後學のものゝ指針となつたものだらう。

一七 阿彌陀經講録 一卷 功存 二三八〇  
二四五六

三段分科を立てた。即ち大意、釋名、入文解釋である。大意の中、更に四門即ち一、教記所因、二、所説大猷、三、宗體定判、四、藏教所攝に分別した。この科段は望西の大經鈔の大意に模して隨義轉用したものであらう。

宗體論に於ては、一切諸經に各宗體といふものがあるが、本經の宗體は、宗家に准ずるに念佛をもつて宗と爲し、往生を以て體となすのであつて、本經の首尾通じてその所尊は念佛にある。即ち往生を期することが中心問題であるからであると、簡潔にその要領を示してゐる。

入文解釋に至つては、淨土宗諸家の釋相をとりいれて隨義轉用せるところが多いやうである。いふまでもなく『弊帚録』の指導によつたところが少くない。なほ『願生歸命辨』の意見は、本經注釋の上にはあまり露骨に出てゐないやうである。

——龍谷大學研究室藏本、寫本は誤字が多くて讀破するに不便である。

一八 阿彌陀經天明録 四卷 智洞 二四六六

玄談として十門を立て、

一、教興所由、二、藏部所攝、三、判教差別、四、所被機類、五、能詮教體、六、所詮宗體、七、部類傳譯、八、標列註家、九、解釋名題、十、隨文釋義。

その教興所由門に於ては、特に五由をあげ、僧樸師の『法事讚甄解』及び『弊帚録』の意見を繼承して、更に助釋を試みてゐる。

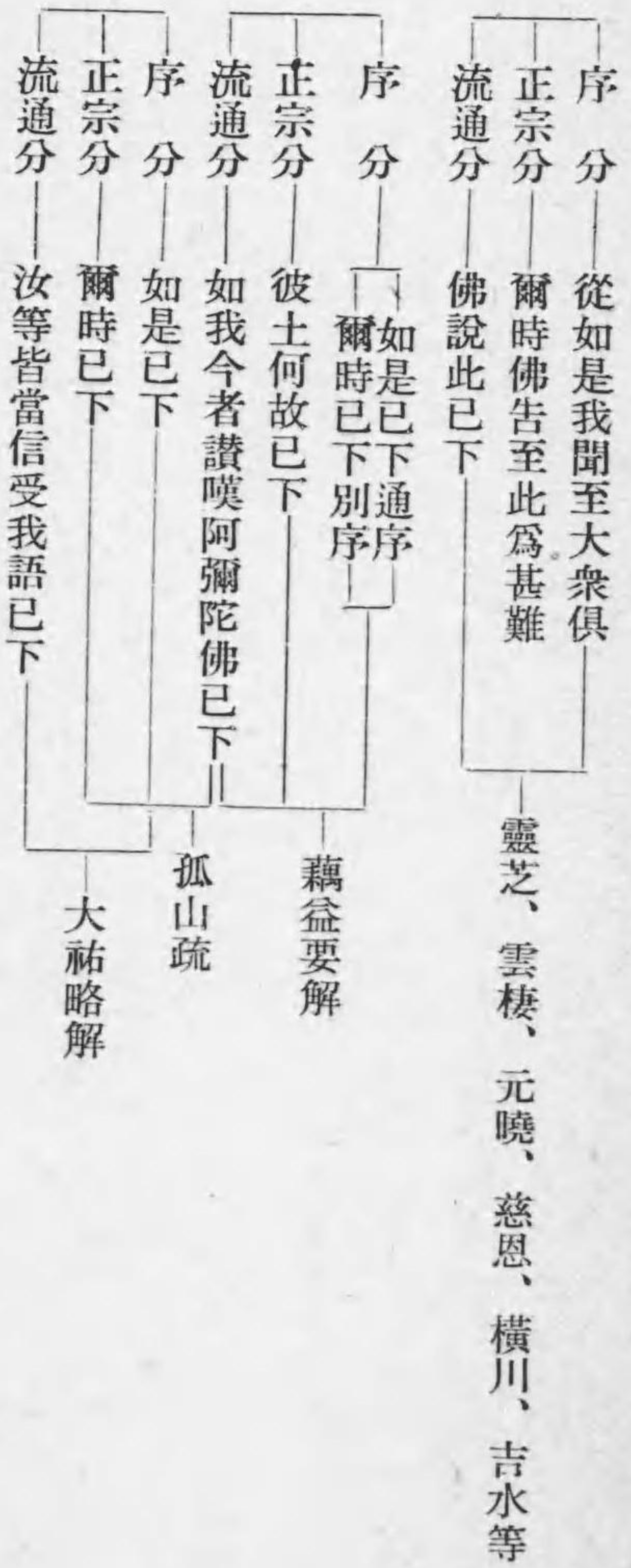
- 一、爲合說機法眞實故——依口傳鈔
- 二、爲的示廢立極要故——依化土卷
- 三、爲顯諸佛證誠故——依愚禿鈔
- 四、爲顯示三佛同入妙旨故——依唯信文意
- 五、爲顯明本願成就故——依第十二願第八願文

以上の五由は陳善院の『甄解』をそのまゝ襲用してゐる。

その藏部所攝門及判教門の所論は資料の豊富なると、それに對する組織などまことにあざやかなものがある。恐らく天台教學の學者であつたらう。

第十隨文釋義門の中には、三分の不同を挙げ古哲の義をまとめてゐることは後學を資益することが多い。





その隨文解釋に至つては驚嘆に價すべき博い學識を盛りあげて、その文筆の暢麗通釋の妙は常人の及ぶところではない。釋文の中、明本懷の科段にある應當發願願生彼國の經文については、功存師祕傳の願生歸命の片鱗があらはれてゐる。江戸獄中の詩として傳へられるものは、

縲繼幽居歷幾霜、閑餘八月覺新涼、閑松雨滴琴聲止、破牖風來笛律揚、獨臥單衾驚劍影、空歎暗枕冀燈光、蒙恩有免籠中鳥、遠博天涯自在翔……鈴木法探師著眞宗學史二八八頁

一九 阿彌陀經增明記 四卷 道隱 二四〇一—二四七三

懸談玄意を七門とす。教興、宗體、藏部、説人、名題、傳經、宗教である。大體に『甄解』の義を繼いでゐる。

教興門には『法事讚甄解』の五門分別の上に更に又五門を加へた、五門とは即ち一、爲顯佛々本乘故、二、爲誓重満足故、三、爲施無極大悲故、四、爲願心莊嚴故、爲説本願成就故、五、爲顯一代終歸である。

宗體門に於ては、化卷祖釋によつて隱顯兩宗を立て、その隱彰宗は三經一致の義に約しての所談であるから、選擇本願行信爲宗、眞實報土難思議往生爲趣である。本經の執持名號は即ち信行不二の行である。又、一心は即ち行不離の信、金剛眞實信心海であり、諸佛證誠は唯だこの選擇本願の行信にあることを顯示したものである。その顯宗についていへば善本徳本也、自利一心也、信を宗と爲し、難思往生を趣となすものである。即ち方便眞門の因果として化卷本十七丁に示されたところであると明斷した。



而して、本經に方便を帶ぶる所以を明に斷じて、顯の義がなければ一類自力念佛の機を引導すること能はず、また隱の義がなければ本願の眞實を彰すことかなはないからである。それだから、彌陀は誓を兩願<sup>二十八</sup>に立て釋迦は亦、大經の外に別に彌陀經を説示したものであつて、二尊深くその素懷を彰されたものである。よつてその體は因果を分たず、非因非果であつて不離因果である。因果の所歸についていへば宗體は不即不離である。要は本經は名號を經體としてその宗は眞假に通ずるのであるとした。

次で藏部所攝に於て、先づ藏教、次に部教を論じ、また説人不同に至つて、能説教主と説人差別とを詳説し、釋名題門、傳經門に及び宗教門に於て師の素懷を力強く述べ、祖判によれば本經は觀經に準知して隱顯の義を立てたが、もとより觀經と同類ではない。觀經は諸行を以て念佛を覆ひ、本經は自力心をもつて弘願を隱覆するのである。その自力心たるやもとより定散心の餘習であるから、この點から觀經に準知するといはれるのである。若し轉執亡心すれば則ち聞名一心即得往生であつて、正しく十八願成就の相である。とその釋明妙を得たものと思ふ。

二〇

佛說阿彌陀經講義

八卷

大谷派深 勵

二四〇九  
二四七七

玄談十門分別、即ち初辨說經時、二明教興由、三顯藏部攝、四判教漸頓、五釋經宗體、六定所被機、七述隱顯義、八示翻譯異、九解經題目、十入文解釋である。

惠空の『義要』に於ける科文によつて、更に該博なる學識を以て註解を試みたもので後學の指針となるべきものである。また、『駕說』、『聖淨決』、『弊帚錄』及び理綱院の所論を常に採用してこれに嚴密な批判を加へながらあらゆる問題を解決してゐる。

二二

佛說阿彌陀經紀聞

二卷

履 善

二四一四  
二四七九

玄談に五門擧げて、辨興由、釋分齊、明宗體、辨所爲、科分段、がそれである。興由門を更に二分して、顯說興由、隱彰興由とし、顯說興由をまた二分して、一は爲述二十願成就故、二は爲誘眞門不定聚機故として、祖判化卷の眞門釋によつたものである。觀經に於ても顯說の興由に二義あることはまた祖判に明示せられた。更に隱彰興由については、祖判に則り、師訓を參酌して開いて十種としてゐる。



- 一、爲「示出世本懷故」——『法事讚』、『和語燈』、『化卷』、『一念多念證文』による。
  - 二、爲「說光壽名義故」——『禮讚』、『行卷』、『小經讚』第一首による。
  - 三、爲「明廢立正意故」——『法事讚』、『和讚』第二首による。
  - 四、爲「示本願證誠故」——終南吉水の御釋『和讚』第三第四による。
  - 五、爲「合機法二實故」——『散善義』、『和讚』第五首による。
  - 六、爲「結一代衆會故」——『法事意』、『口傳鈔』による。
  - 七、爲「示三心卽一故」——『和語燈』、『化卷』、『唯信鈔文意』による。
  - 八、爲「明釋尊自行故」——『唯信鈔文意』、『諸神本懷集』、『破邪顯正鈔』、『步船鈔』等の指南による。
  - 九、爲「示現生不退故」——『吉水小經釋』、『眞要鈔』による。
  - 十、爲「示三佛同入不可思議故」——古來先哲相傳の釋意である。
- 以上十種興由について詳細に釋成して祖判先哲のあらゆる所説をまとめ、たぐみにこれを祖述してゐることはまことに多とすべきである。また玄談五門の中、第二門分齊門に於てまた六門を開き
- 一、約二藏、二約二教、三約三藏、四約十二部經、五約二雙四重、六約三願三藏三門三機

三往生としてゐる。

第六門は深諦院の發揮であるとして功を先師に推し、本經は、功德藏をひらき、二十願をあらはし、眞門法を説き不定聚の機に被らしめ、難思往生を證せしむることが本經の顯説である。若し隱彰の實義によると、觀經と同じく大經の分齊と同じいものである。こゝで師のゆきとゞいた學解に敬意を表したいのは、觀小二經の隱顯問題についての釋相である。即ち、

元來觀經は一經の首尾定散二善である。従つて觀經に於て直ちに弘願眞實の法門を求めることはかなりの困難がともなふ。よつて、高祖も、依釋家之意、按無量壽佛觀經者、有顯彰隱密義、と釋されて、終南をその媒介として弘願相をとらへられたものである。更に今經に於ては觀經よりはより以上にこの點については困難である。

よつて高祖もまた、釋家の意を按察して以て准知觀經、此經亦應有顯彰隱密之義と眞門をみきはめられたのである。然るに、本經の化法よりこれを窺ふに、本經所明の依正莊嚴に於ても『論論註』の指南によれば三種成就願心莊嚴の修多羅眞實功德相である。また光壽二無量の二徳は眞佛眞土にして三世諸佛の本門であつ



て、終南の釋によれば光明名號攝化十方とて、十方攝化の根本と定められた。また、聞説阿彌陀佛執持名號は、大經の聞其名號と同意である。聞説とは重ねたる深義であつて、光壽二無量の二德名義を聞くことである。されば釋家祖意ともに甚深の妙德として禮讚せられた。また本經文一心不亂とは、北天によつて我一心と祖述せられたものであらう。また、我見是利の經文は、大經の眞實之利。流通の爲得大利と消息を同じくするものだらう。更に、六方證誠護念の經文はまさしく第十七悲願成就の明徴であり、加之、本經文中、しばしば名號を不可思議功德と讚嘆せられたのは、十七願成就文の威神功德不可思議、并に流通の大利無上功德と同型のものだらう。更に舍利弗若有善男子乃至皆得不退轉の經文は現生不退の明證である。また、この經に三佛同入不可思議功德とは『論』によつて入一法句不二法門の妙法門の開顯となつたものである。最後に難信之法の經文は明に大經の無過之難の説相と同類である。

以上の經證によつては本經を目して眞門分齊とするについてなほ疑議ありとして、また更に、大經中に於ても三輩章、胎宮邊地の所説もあり、この外方便相の所談數々あり、また本經の化儀の上より窺ふに無問自説であり、ために高祖は如來出世の正意なりと判せられた。かうした種々の材料から考へると本經を直に眞門經として取扱ふことには幾多の疑議が残る。

これらの疑議について詳細なる答辯をあげてゐる。その一々の論難に對してはたゞに弘願にとりきるべきではなく、眞門としてこれを取扱ふにも理由がある。蓋し高祖の眞門判は、そのもとづくところは、本經文一日七日執持名號である。日數の多少、念の多一多をみるは明に自力の機情である。だから貶して眞門と判せられたものである。もとより一日七日に若の字を冠してあるところから、若は不定の義であり、本願の乃至と同義であるとも按察せられないことはない。たとひ多善根多福とか、執持とか説かれたからとて、それは大經の無上大利若くは信樂受持と同意であるとも窺はれるが、臨終來迎の經文に至つてそこに眞門の格をはつきり認められるやうである。たゞし、高祖の來迎判の本格的態度は十九願觀經益とし、來迎は諸行往生にあるとし、二十願は果遂の定判を用ひられた。そこで、なほ眞門判の祖意につき重々の疑難をかりに設けて遂に次のやうな結論に達したやうである。

祖判によれば、もとより釋家により眞門と判せられた。准知觀經、此經亦應有顯



彰隱密之義、言顯者、經家嫌貶一切諸行少善、開示善本眞門、勵自利一心、勸難思往生、是以經說多善根多功德多福德、因緣釋云九品俱廻得不退、或云無過念佛往西方、三念五念佛來迎、此是此經示顯義也、此乃眞門中之方便也。

この祖釋を窺ふに、一宗二因、二宗一因の深義があるとして巧に論斷をすゝめ、また、釋家の義を詳かにして、終南、横川、黒谷の祖釋を分判してゐる。

次で、宗體論に於て、他師の所論と今家の所論とを判擇して、他師の所論に於て三論家は吉藏の『觀經疏』并に『法華遊意』によるに宗體或同或異を立てる、淨影の『觀經疏』には宗のみを談じて體の沙汰はないやうであるが、やはり宗體同義の所談である。『大經宗要』、『小經疏』によるに元曉は淨土因果を宗體となすと論じてゐるが、やはり宗體同義をとつたやうである。天台は『法華玄義』に於て諸法實相爲體、一乘因果爲宗と宗體を一應分別してゐるが、『觀經疏』に於ては、觀經實相爲體、以心觀淨則佛土淨爲宗として、體は非因非果、宗は亦因亦果の所談である。これに準せるものは、智圓、智旭、大佑、性澄の釋師はすべて天台に准じてゐる。禪宗では『六祖壇經』に無念爲宗、無相爲體とした。法相唯識では『述記』、『義林章』、『十論疏』等によれば、攝相歸性體、攝境從識體、攝假從實體、性用別論體の義を述べてゐる。雲棲

の『小經疏』は唯識の所論によつて淨土門の宗體を分別した。

次に今家相承に於ては龍天二祖には宗體の取扱はないやうである。『論註』には以佛名號爲經體と體のみを談じこれに對して西河は宗についての所論はあるが體については沙汰なし、吉水もまた宗のみの所談である。宗體について并べ釋するは終南と高祖とである。

高祖の上では大經の宗體は『教卷』に夫顯眞實教者即大無量壽經是也、乃至是以說如來本願爲經宗故即以佛名號爲經體也、又偈前の文に凡就誓願有眞實行信亦有方便行信乃至大無量壽經之宗故、他力眞宗之正意也とは本願爲宗を判釋せられたものである。この祖意を窺ふに、四重の宗體あり、一には一如爲體、光壽爲宗、二には光壽爲體、名號爲宗、三には略名四字を體とし、廣名六字を宗とし、四には六字所行爲體、能行信行證果爲宗となるだらう。

次に、觀小二經の宗體については宗のみを釋して體の沙汰がない。然しその祖判を竊に窺ふと、觀經は二體二宗、小經は一體二宗である。觀經の隱彰の實義に於ては大經と同じく、名號爲體、弘願念佛往生因果爲宗であるが、その顯說に於ては定散二善爲體、息慮凝心廢惡修善爲宗である。また、小經の隱彰の實義によれば、名號



爲體である。而して弘願の因果を爲宗とするが、顯說當分によると、體は名號であるが、機失をもつてこれを覆ふが故に法は眞門に墮し、自力念佛の因果を宗と爲すべきであると論じてゐる。玄談五門中、第四第五門は先哲の義を忠實に繼承してゐる。

この紀聞は師の六十三歳の時、學林にて安居開講せしものであるが、學解圓熟の域に達せる師の風格を窺ふことが出来る。これ宗學界の珍寶として重視さるべき發表である。

二三 修刪阿彌陀經論 二卷 履善 二四一四 二四七九

二三 非修刪阿彌陀經 一卷 履善 同前

先に『修刪阿彌陀經』大宰純の著述にかかるものについて概観したい。修刪經には前序。凡例。後序。と本文とがある。

前序によれば、釋典無文、釋氏之徒、以其文爲文、不取也、と筆を起して、支那に於ても東漢兩晋代は實に文字に貧しかつた。加之、經典には譯書が多いのだから尙ほ更、

釋典の詞辭は下品になつたのである。

余一日試に阿彌陀經をとつて、その原文によつて、一二節の詞辭を改竄して、それを或る釋氏の徒に與へたところが、大に共鳴して、全文の修刪を願望したので遂に全篇を修刪して、假に修刪阿彌陀經と名づけた、本經はもとより愚者のために擬作したのだから、文々句々俗氣に満ちてゐるために、改刪の仕甲斐のないほどのものである。

凡例は八條から成つてゐる。その一條に、佛經典とは元來佛陀の一場話であつて、悉く後人の記録篇輯になつたものである。だから、その大部分のものは俗間の一部小説のやうなものである。梵音修多羅といつたものを譯者は強ひて尊嚴を保たんがために經と譯したのであつて、釋典そのものは決して經とはいはれない。釋典の原型は多く當時の俗語からなつてゐるのだから、文なんぞとはいへたものではない。それで、その中の冗長を去つて、更にその鄙俗を改めて初めて文といはるべきである。この阿彌陀經は原文一千八百五十七字あるが、今修刪して一千四百七十三字とした。

その第二條に、如是我聞とか、一時、爾時、復次、所以者何、無有是處、とか、單字の作、說、淨



等は皆俗語であるから、すべてこれらを修削した。

その三條に、釋典には單辭に對する複語が多い、例せば智慧、愚癡、貪欲、解脫、光明、等々然るに智と慧、愚と痴各字義は別である。それを複合して、連合の意味に用ひてゐることは全く俗語體の證據である。

その四條に、釋典中に使用されてゐる、誓願といふ辭は志といふことであり、煩惱とは累の換へ名であり、方便とは術のおきかへであるから、これらを悉く改めた。

その第五條に、釋典の常として大の字を用ひてゐる。これは誇耀の辭句である。元來古書に出てゐる大は小の對辭である。かうした誇張の意味に使用されたものは悉く省略した。

その六條に、釋典には寓言が多い、梵語などを使用することは、いたづらに好奇心にかられたものであらうが、さて、古來使ひ習されたものは刪修しがたい點もあるので、そのまゝとしたものもある。

その第七條に、經題には一呼吸でいひきれないほど冗長なものもある。實は單なる形容詞の美麗句を重ねたに過ぎない。ことに佛説の二字は一向不要だから、かうした點に留意して、いらぬものは悉く刪去した。

その第八條に、なるべく原文について、刪修して文らしくしようとしたものであるが、原文にかゝはらず、思ひきつて、改削すれば今少し面白いものが出來たらう。

後序には、修削阿彌陀經を公にして數月ならずして、芝山傳通の二叢林のうちで盛んにもてはやされた。而も、芝山傳通は專念彌陀の道場である。偶然のことだと見のがせない。然るに禪門、この修削を誹謗して阿鼻獄を結果するものだといふ。かうした暴言は勝手ではあるが、佛言を破するといふことになれば問題でもあらうが、翻譯者は文辭に黷く、加之、愚見を蛇足したものを修削して墮獄の罪に問はれては勘定にあはない。この私の試みを契機として、若し釋氏が、古來の譯者の不文を刪して、修辭の道を知つて、採るに精華をもつてするといふことになれば、佛陀もまた大に多とするだらう。さすれば、純は佛敎に功こそあれ、純の生涯はために多福であるべき筈だ。

以上、純氏の率直な意見であるが、冷靜久しうすると、また敎へられるところが多いやうにも思はれる。

太宰春臺の生涯については名は純、字德夫、通稱彌左衛門、號春臺、紫芝園、信濃飯田の産。靈元帝延寶八年(二三四〇)九月十四日生れ、櫻町帝延享四年(二四〇七)五



月晦日亡、六十八歳學統は中野僞謙、荻生徂徠に屬す。徂徠の歿後その學を繼述す。著書、易占要略一、近體詩韻一、群書雜抄一、經濟錄一、論語古訓十、論語古訓外傳二十、等數十部に及ぶ。

『修刪阿彌陀經』に對して、敢然立つたものは履善師であつた。

『修刪阿彌陀經論』上下二卷に於ては、

或日、芝山傳通の徒に遇ふて、大宰純の『修刪阿彌陀經』熟覽した。もち屋はもち屋で、學者に財貨に通ずるものがないのと同様に、純は一介の儒者である。紙研の間に生れて、翰墨の中に長じたものである。美句麗辭を綴る道は知つてゐやうが、圓頓了義の教、幽邃精微の理、廣大悠遠の行に關しては、全然無智無能であらう。今修刪經一千四百言、決してまづい文辭ではない。然し文を以て淫するといつた大過がある。昔、比叡に成覺なるものあつて、善導本によつて本經の而雨の文を雨天に改作した、山徒は怒つて遂に成覺を叡岳より逐放したことがある。その事たるや、あまりにも岳徒の固愚を示すものでもあらうが、一面また、法寶をいかに重視して、一字も苟くせずといふ眞劍味を尊敬せねばならぬ。春臺、名ありと雖も、謝靈運、歐陽修に比べて遠く及ばざるものとせねばならぬ、その靈運陽修にして決して春

臺の潜越を許容せないであらう。

また翻譯文を修刪するといふことは非常な暴舉である。なせならば、原本を知らずして譯文のみを見てこれを修刪するのだから、隔靴搔痒でもあり、また學的態度でもない。純は日本の小人であるから、地理的にも西域とはよほどの距離があり、また什公に生れおくれること千有餘歲、梵語に達せず、文獻足らず、いかに春臺にしても、たとひ煥爛の辭を吐くにしても、その修は却て修とはならず、刪また刪たり得ない。例せば、純佛説の二字を簡單に除いたが、この佛説の二字その表現するところ深甚であつて、別時意難を遮せんがためであり、唯佛獨明を明さんがためであり、因人重法を示さんがためでもあつた、だから、西河、終南、等佛説の經題を釋成する上に意をもちひられたのである。如是我聞、また佛説と同價値の文字である。結集の日の阿難の相好魏々として佛の相好と異なることがなかつた。衆僧大に怪んだが、阿難、如是我聞と宣言して、衆僧の疑議氷解したと傳へられる。これらの經文を修刪して、削除すること墮獄罪にあらずしてなんぞや、更に指方立相を破壊するなど決して許容すべきではないと言々火を吐く論法で駁難しつくしてゐる。

『非修刪阿彌陀經』に於て、序言を破斥し、凡例の第二、正文第三に於ては内外の學



にわたつて廣く比較對照してその非を摘示し、學人の昧心を啓き、智者の明慧を發し、腐儒の徒が正法の華苑を殘ひ、佛化の清流を汨することを誠め、以て釋氏のために萬丈の氣焰をあげてゐる。

二四 阿彌陀經舒舌箋 一卷 不完本 道振

二四三三  
二四八四

文化癸酉晚秋、圓龍精舍に於て講じたもの、故高野長明氏の寫本にかゝる。七門の玄談を置いてゐる。明興由、辨說時、釋經題、顯宗體、判分齊、示義例、解文句、がそれである。

文辭はきはめて簡潔であつて、引用の經文等多くは「云々」にて省略してゐるが、大體の組織といひ、釋相といひ、まことにあざやかである。興由に於て通由、別由を詳説して、通由の上での、釋家、祖釋の配列鹽梅といひ、別由に於て、略出十由の點で祖釋、列祖判の配別などまことに巧みなものがある。

一代結經論に至つては、先哲の所論をまどめたものと窺はれるが、その三輪四門についての説明は、實に要領を得たものである。四門の説相は、第一本末差別門、第二、從本垂末門、第三攝末歸本門、この中特に四重に別開し、大小、聖淨、眞假、信疑に分別し

て、第四本末無碍門をもつて通論とし、別論は更に、三願、三誓、機法、三佛、體用の諸門に依つて縱横に論斷してゐる。更に宗體論、隱顯兩宗論に於ても問答體にはつきりまとめられてゐる。

本録は單なる素讀によつても、本經の玄談と入文解釋との大綱がはつきりつかめるやうな風格をもつてゐる。師は漢學の造詣の深かつた學匠であつたとうなづける。

二五 佛說阿彌陀經丁丑錄 二卷 芳英

二四二三  
二四八八

玄談に五門を分別す。即ち翻譯時人、釋家分齊、相承大綱、今釋所據、一經玄旨がそれである。

就中相承大綱に於て、師の獨自の面目が出てゐる。今家相承に於ては三部に三門を立て、即ち、『三經往生文類』等は顯說不同門を顯はし、『略典』に於ては隱彰一致門を示し、『化土卷』本は、隱顯合論門を示された。もとより宗家隨自法義によられたものである。これ眞宗相承、論祖釋義の大綱であつて、通相諸家の釋義に超異したる往生淨土の法義、超世無上の大願である。



一經玄旨門に於ては、近世宗門の法將の所論をまとめて、天台五重玄義に准擬して一經の玄旨を巧に論じてゐる。

その釋名門に於て、辨體、明宗、論用の各門に於てきはめて簡潔に要領を論述してゐる。もとより先哲の義をはつきり繼承しながら、それに對しては忠實の態度を保持してはゐるがその間、嚴肅な批判もあり、學的態度を堅持してゐる。

二六 阿彌陀經丁亥錄 五卷

大谷派法海

二四二八  
二四九四

先づ述玄義と解文義との二大段に分別し、述玄義の中、更に七門を立てた。一、辨部類前後、二、明教興因緣、三、顯藏部所攝、四、示教攝分齊、五、判一經宗體、六、定得受機類、七、釋冠首題目である。

第一門に說時前後論を因論して、先づ支那諸家の説を擧げてゐるが、因に僧肇の疏について嚴かな批判を加へ、恐らく慈恩の疏と同じものだらうとまで斷言してゐる。この點に師の面目がはつきり出てゐる。而も元祖の三文一理釋相を明確に繼承してゐるが、これに對して龍興の『疏』の妨難を巧に會通してゐる。

次で本經の結經であることに關しても先哲の通り、淨土の結經とする義と一代

の結經とする義との二義をあげ、終に今家の宗義上また大觀小の次第たるべきことを論成した。

第二教興門に於ては、支那釋家の慈恩、元照、雲棲の疏を批判して、これらはすべて聖淨二門混淆の失ありと評し、次で、今家先輩の義を評取して十義を建立してゐる。

- 一、無問自說して本懷を成せんが爲の故に
- 二、具に廢立の正意を顯開せんが爲の故に
- 三、機法二の眞實を合說せんが爲の故に
- 四、阿彌陀の名義をきかしめんが爲の故に
- 五、釋迦諸佛の勸信を顯はせんが爲の故に
- 六、釋迦諸佛の讚嘆を顯はせんが爲の故に
- 七、一切諸佛の護念を顯はせんが爲の故に
- 八、諸佛咨嗟の願成することを示せんが爲の故に
- 九、不果遂者の願を開說せんが爲の故に
- 一〇、まことに詳細な説明であつて、先哲の義をよく組織づけたものである。

第三門藏部所攝については、廣く『地持經』、『瑜伽論』、『中論疏』、『大乘義章』、『義林



章』さては、天台の『義記』等、支那浄土釋家の諸説を逐一紹介して、高祖の鴻判に結んでゐる。第四門教攝分齊に於て、華天諸祖の判を擧げ、元祖の『教相章』宗祖の『愚禿鈔』を祖述して三願三經三機三往生の法門を開演してゐる。第五門一經宗體については、諸家の義を評破して今家の義を述べてゐる。その中、攝大乘論新舊兩譯論の四意趣論にまで論及し、隱顯釋を詳に論述してゐる。

その他の門に至つては、今家先哲の義を繼承して該博なる學識を本録の至るところに示してゐる。ことに聖浄決の義を尊重したものの、やうである。

二七 阿彌陀經聞書 二卷

性海

二四二五  
二四九八

玄談に於て、懸説綱要分と入文解義文とに分ち、綱要分の中更に五門を開いてゐる。即ち

一 教興門、二 宗體門、三 藏部門、四 傳譯門、五 釋名門、である。

その大體は陳善院の『法事讚甄解』によつたものであらう。僧鎔道隱兩師を繼いだ師は、既に宗學の大成期に出たものだから、全く宗學の定規のうちに閉ぢこもつて、深く細かな點に留意してこの『聞書』を講じたものであらう。

その宗體門に於ては、明教院の指南により『受信録』をそのまゝ依用して天台教學の宗體論を巧に隨義轉用して本願爲宗、名號爲體論を確立してゐる。

こゝに今家先哲の諸説を批判して、『駕説』、『聖浄決』、『弊帚録』の中、『駕説』の所論最も巧みであるが、教卷の宗體釋を引いて眞假を論ずることは恐らく祖意にかなはないだらう。しかるに僧撲師の『法事讚甄解』に論じてゐる隱顯兩宗に約しての明判は後學の依憑とすべきものであると評取してゐる。その他の門々すべて明教院の所説を忠實に繼承してゐる。

二八 阿彌陀經筆記 二卷

僧朗

二四九二  
二五一一

玄談として十門分別を擧げて、教興、所由、出世本懷、藏教所攝、經宗體、所被機、隱顯義、梵本傳譯、諸註評破、釋題目、入文解釋の條々について意見を開陳してゐる。

玄談については、淨影、天台、嘉祥、慈恩、賢首、清凉は悉く文前玄談を設けてゐるが、註維摩の如きは直に題號を釋して玄談を置かない。今家の祖釋を案ずると、『論註』は初に難易二道の判をあげ、次に往生論の大綱を述べ、次に題目を釋し入文解釋してゐる。終南大師は觀經釋に七門玄義を置かれた。源信源空兩家は初に大意の



科を設け、次に題號を釋してゐる。支那明代雲棲の本疏鈔は清涼の大疏鈔に依つて十門を開き、藕益は智者大師の釋體に習ふて五重玄義を設けてゐる。本派の先哲の中『駕說』、『法事讚甄解』などには玄談として七門六門を擧げてゐるところから『本筆記』に於てもまた『駕說』、『甄解』等によつて十門分別を設けたものであるとして、その各門について詳細なる註釋を試みてゐるが、本筆記一部を通じて『甄解』の釋相に則つた形跡が多いやうである。

就中、第八諸末註を評する門に於ては、支那日本のそれらを悉く評破して、要領よく適正な批評を加へてゐることは師の學績としてたゞへたい。

二九 阿彌陀經松江錄 一卷 月珠 二五二六

玄談に五門分別を擧げて、一は興由、二に大意、三に宗體、四に說時、五に題目がそれである。本經の興由については二由を擧げてゐる。即ち一、爲開示方便眞門、二、爲顯彰極難信法である。その解説は簡にして要を得たものである。萬機普益、凡聖齊攝の本願一乘に福德、功德の二方便藏を開顯し、觀小二經顯說の消息を明斷し、更に化卷に付屬文を引用せられて眞門義を證する眞意を解説してゐる。次で極難

信の法を闡開して隱彰の義邊を并せ陳辨してゐる。大意を示す一段に至つては、初說彌陀依正(彌陀依正分)次顯衆生往生因果(衆生因果分)後示諸佛同讚(諸佛同讚分)とし、衆生因果分に於て、眞假隱顯をはつきり判定してゐる。

その宗體を示す一段に於ては、諸家の說相、不同であること、淨影、天台、嘉祥、慈恩等の所論を批判し、今家相承についても、雁門、西河、終南のそれに及び、宗祖の名號爲體本願爲宗に結し、『二卷鈔』、『化卷』の意のあるところを窺ひもつて本經の宗體を確立した。

更にその說時の一段に於ては、『口傳鈔』の指示により大觀小の次第を論成した。即ち法實、機實、合說證誠をもつて次第論の基調としたやうである。然してその次第の相狀については吉藏の教判三轉法輪の型を採つたやうである。かの『出世元意』及び『法華問答』を典據として本經の一代結經たる所以を明示してゐる。次で解題入文解釋に至つてはきはめて簡單ではあるが相承、古哲の意のあるところを巧に織り込んで遺算のなからしめてゐる。

三〇 小無量壽經聽記 一卷 行照 二四五五  
二五二二



玄談に十門分別を試み、叙教興、辨宗體、判分齊、論說時、明所被、示勝益、述傳來、評末釋、釋名題、釋文句、がそれである。『通讚』、雲棲の『疏』から、『弊帚錄』、『駕說』、『法事讚甄解』、『明教院錄』、『聖淨決』等によつて、古來先哲の意見をまとめてたくみに一部を通釋してゐる。

龍谷大學所藏の弘化二乙巳歲五月 遍照山玄調書の聽記によつたものであるが、誤字多く筆録者の學識がうたがはれるほど亂雜なものである。

三二 阿彌陀經聽記 一卷 善讓 二四六六  
二五四六

三三 阿彌陀經講義 一卷 善海 二五一五  
二五八三

『聽記』は、『甄解』、『增明記』により、玄談として七門を建てた。舒教興、判藏教、明宗體、定說時、辨傳譯、解題目、釋文義がそれである。

その舒教興門に於て、五意をあげ、一、果遂の願功を顯示せんが爲め、二、廢立の極意を的示せんが爲め、三、機法眞實を合說せんが爲め、四、一代の終歸を顯明せんが爲め、五、極難信法を信受せんが爲めと、その所明顯了なるものがある。他の六門には、古

哲の義を慎重に評取してゐる。

『講義』は玄談六門とす。叙教興、判藏教、明宗體、定說時、辨傳譯、六解題目

教興門に於て、『法事讚甄解』、『增明記』、『聞書』、『聽記』等を參考して、八由を擧げた。

一、爲開說二報莊嚴故、二、爲顯示果遂願功故、三、爲的示廢立極致故、四、爲合說機法眞實故、五、爲顯彰諸佛證誠故、六、爲開示三佛同入故、七、爲顯明一代終歸故、八、爲信受極難信法故がそれである。

第一由は經文彼土何故名爲極樂より諸上善人俱會一處の文に至る依正莊嚴分である。依報とは廣略相入、作用不可思議である。正報とは主伴不二機法一體の嘉號は速疾に光壽の妙域に契はしむるから諸佛不共別願因縁の佛德である。この依正二報すべて至要至妙ならざるものがないことを開說したものである。

第二由は、巧に今經を説て果遂の願功を顯示せんがためであつて、由來、果遂の願本には始終二轉の妙用がある。始門に於ては、この果遂の誓願をもつてこれを要門に對するときは則ち諸行の機をして眞門念佛に轉入せしめる妙用がある。『化卷』本『和讚』の指示はそれである。即ち從要入眞の始門である。その終門についていへば、眞門念佛をして自然に利他の信海に入らしめる妙用がある。『和讚』



の指示はそれである。即ち果遂の終門、從眞入弘の轉入の相である。

第三由は、今家の妙判であつて、他師未だ廢立に言及せず、吉水『漢語燈』小經釋に初めて廢立を語る。然るに觀經當分に於ては行體廢立の所明ではないから、更に今經を説てもつて廢立の正意を開顯せられたものである。

第四由は、已下先哲の義を該攝して、巧にこれを解説してゐる。

その判藏教門は先哲の義を繼ぎ、宗體門に於ては三論天台等の諸家宗體をあげ、別して今經の宗體論については支那の諸釋家から、今家の先哲の意見を列擧して批判し、師の意見として顯隱兩宗について明斷してゐる。定説時門に於ては文證、理證、義證を立て、大觀小の次第を論成してゐる。傳譯門、題號門についてもまた、すべての問題を論究してゐる。入文解釋に於ても、その科段については、慈恩の三分科孤山の三分科、藕益の三分科、大佑の三分科、等を資料として、證信發起の二序についても、支那諸家の所説を批判してその完成を期せられたやうである。

この講義は、愚生學生の時代に親しく故和上の膝下に於て、龍谷學會發行のもとに編輯せしものである。かうした深い因縁があるために、特にこの講義がなつかしい故和上の温顔が今もなほはつきり思ひ出される。

## 結 篇

### 阿彌陀經の諸問題

本經は古來の經錄史傳に於て『小阿彌陀經』の名に於てよびならはされてゐるとほり僅かに四五枚の經文ではあるが、その内容は廣博幽玄而も深甚微妙の構想のもとに説示せられたものである。

元曉の『佛說阿彌陀經疏』に「兩尊出世之大意、四輩入道之要門、示淨土之可願、讚妙德之可歸、妙德可歸者、耳聞經名則入一乘而無反、口誦佛號則出三界而不還、何況禮拜專念讚詠觀察者哉」と讚し、また、源信僧都の『阿彌陀經略記』には「其文約略其義含弘、籠五岳於一簣之山、宗四海寸波之上」と讚せられた。これ全く本經の構想内容を絶讚せられたものである。

本經所顯の問題のことごとくが、一代所説の結論でもあらう。随つてその所明のすべては佛出世の本懷であらう。かうした本經所顯の問題を簡單に概観することの無謀を反省しながら、祖釋并に先覺諸賢の指示によつて經文を見失はない



用意をもちながら四五の問題を取扱つてみたい。

### 一 教 興 論

大我の『阿彌陀經略纂』に

竊以眞如爲體也、冲虚妙粹、炳煥靈明、無去無來、冥通三際、非內非外、洞徹十方、夫此本覺心體、吾人賢聖無有差忒、然一切衆生、不知是理、妄想我相、觸事迷眞、故頭々扞格、處々乖張、馳騁六塵、隨境而轉、因茲輪廻六趣、受苦萬狀、不能已也、覺皇慈父、深憫狂子、出御玄宮、光闡道教、透誘獎卒、將歸眞也、是以雖歸眞無二、而隨情非一、漸頓偏圓、各稱所宜、隨緣者則皆蒙解脫、蓋此欣慕摩提、稱揚阿彌、善巧方便者、三根普攝、五逆徧收、實超世願勝、駕越一切法門、甚深難信、所以獅王之明慧、不敢說鷲子之利智、竟無問世尊鑒機知時、已至不獲己、自說言當信是稱讚、不可思議功德、一切諸佛所護念經、喻之悲母拊嬰兒、不俟其請、但欲顧其手足乳而哺之、可謂如來出世本懷矣。なんとなく、ひきつけられるやうな持味がある。大我師の人柄がすらすらと窺はれて自ら頭がさがる。

『駕説』に

大聖設化、雖屬緣多門、而統其本意、唯欲令諸衆生成歸一實、蓋一實旨、雖則無二、若論施設方法、匪莫險夷、特此持名法門、至圓極頓、而且由其簡易直捷、則大聖弘化之本懷、偏在此法、理路爛焉、是以初後極唱終歸于此、諸會稱讚無不悉指、此乃弄引畢竟欲令趣入此門、則一代之時教義、當此法序分、既而覃于時緣方到、現光瑞于鷲峯、起慶喜之快問、示逆緣于王室、開思勝之別選、而雖二經已演、興懷日成、猶準佛願、建立眞假、衆機申習、諸善三輩二善、姑陣權宜之說、然聖智照鑒、當機益復純熟、乃爲無問自說、直望弘願本意、更闡出化幽懷、貶舍餘善、方便勸持、持名眞信、以顯末法濁惡衆生、唯能信受佛智、卽生彼土、速疾證得菩提、(中略)是則結了淨教、正說興世佛懷、於是乎滿、(中略)是以十方河沙諸佛、非直證讚此法、且歎世尊弘宣、亦稱甚奇希有、世尊復自證言、希有不可思議、是所以此經教興起也。

自ら襟をたゞさすものがある。月窓師の平素の味道が言々句々に織りこまれて、力強い主張となつて盛りあがつてゐる。

最初に高祖の御釋から窺つてみると、『化卷』本に

然今據大小、超發眞實方便之願、亦觀經顯彰方便眞實之教、小本唯開眞門、無方便之善、是以三經眞實選擇本願爲宗也。



復三經方便卽是修諸善根爲要也

又『教卷』六句嘆釋に

如來興世之正說、奇特最勝之妙典、一乘究竟之極說、速疾圓融之金言、十方稱讚之誠言、時機純熟之眞教也

竊に窺ふに化卷の教示は三經一致門によつて選擇本願を説かんがためなること、教卷の教示は初四句は大經の意義を述べ、後の二句は觀小二經隱彰の實義を嘆せられたものである。もとより觀小二經の顯説は畢竟選擇本願に入らしめんがための方便教である。その終歸は乃ち選擇本願にあること知るべきである。

次に、今經の教興についての先覺の所論をまとめて參考に資したい。『駕説』に五義をあげ、『甄解』には五由を設け、『增明記』に五門を作つてゐる。『駕説』は主として本經の本質から五義を立て、『甄解』の五由は所説の法徳に約したものであり、『增明記』の五義は能説の佛徳に約したものである。如上の三註鈔は多くの註鈔を代表してゐるものともみられるから、最初に擧げておいたのであるが、その他の多くの註鈔に於ても、各自そのねらひどころがちがつてゐたために、いろとりどりの異説がある。しかし、それら多くの諸説を綜合すると、いよいよはつきり、本經の

眞相がつかめるとも考へられるから、今それら異説を資財として教興論を概観してみよう。

元來、佛教經典の註疏釋の常規として、玄談に於て辨教興由の一段が設けられてゐる。『智度論』第一に、般若教興の因由を二十四釋に重説してゐる。これが後代教釋の通規となつたものだらう。いふまでもなく本經の諸註疏釋に於てもこの通規に則つて教興論を立てゝゐる。即ち支那釋家の註疏を初めとし、日本各宗の諸註釋に至るまで悉くこの問題に言及してゐる。ところが、これら釋家註家の所論は、本經の教興論として、はたして、とりあげるほどの價值のないものかといつた點を反省しながら祖釋に則り、佛意の源底を探つてこそ、そこに更めて教興を論ずる意義もはつきりするわけである。

支那釋家の中、慈恩の通讚疏には二義を立てゝこの問題に言及してゐる。元照の疏には五義を立てゝゐる。雲棲の疏鈔には十義を立てゝゐる。蓋し、これらの諸師は淨土門、ことに本經の教興、本經の力用などについて深い理解をもつてゐたことはいふまでもないが、どこかあかぬけのせぬ點があるやうでもある。所謂、聖道門的なくさみ、がぬけきらないのであらう。かうした妄斷は或は墮獄の罪を構



成するかも知れぬが、率直に評して諸師は聖淨二門の持味を混淆してゐたであらう。かうした疑問は本篇の支那釋家の註疏概観の下で一應述べたつもりである。さて、再び今家の本經教興論について窺ふと、化卷眞門釋の「准知觀經、此經亦應有顯彰隱密之義」とまた、釋迦牟尼佛開演功德藏勸化十方濁世との教示によつて、顯說の教興論と隱彰の教興論とに分判することが出来る。顯說の教興とは第二十願成就と眞門不定聚の機を誘はんがためである。「開演功德藏」とは、佛が本經を説いて第二十願植諸徳本の名號功德藏を開演せられたことであり、「勸化十方濁世」とは第二十願に誓はれた十方衆生、即ち自力念佛眞門不定聚の機を誘引せんがために本經を説かれたものであるとの教示である。

隱彰の教興とは、相承の指南によつて凡そ十由にまとめることが出来る。「法事讚」・「和語燈」・「化卷」・「一念多念證文」を指南としてその教興を窺ふと、其一は、出世本懷を示さんがためである。その二は「禮讚」・「小經讚」第一首の教示によると、光壽の名義を説かんがためである。その三は「法事讚」・「小經讚」第二首の教示によると、廢立の正意を明さんがためである。その四は終南吉水の諸處の釋並びに「小經讚」第三第四首の教示によると、本願證誠を示さんがためである。その五は「散

善義」・「小經讚」第五首の教示によると、機法二實を合せんがためである。その六は「法事讚」・「口傳鈔」の教示によると、一代衆會を結せんがためである。その七は「和語燈」・「化卷」・「唯信鈔文意」の教示によると、「三心即一を示さんがためである。その八は「唯信鈔文意」・「諸神本懷集」・「破邪顯正鈔」・「步船鈔」の教示によると、釋尊の自行を明さんがためである。その九は吉水の「小經釋」・「眞要鈔」の教示によると、「現生不退を示さんがためである。その十は古今諸徳の相傳の釋意によると、「三佛同入不可思議を示さんがためである。さてかうした十由は履善師の「紀聞」の所説であつて、全く古來先哲の教興論を總括したものといつてよい。「紀聞」には更に懇切にその十由について詳述してゐる。

「紀聞」の詳釋によつて、本經隱彰の教興の概念を得て、更に諸註疏をたづねて大體の結論に達したから、左に概論を試みやう。

本經教興の核心は、示廢立にあるだらう。前に列擧した支那釋家の教興論に於て既にその外觀と内相とは論じ盡されたといつてよい。蓋し廢立の示に至つては未だかつて支那釋家の言及せざるところである。

『法事讚』下に「極樂無爲涅槃界、隨緣雜染恐難生、故使如來選要法、教念彌陀專復專」



とある。吉水『漢語燈小經釋』に、三述經來意者、觀經雖初廣說諸行、遍返機緣、後廢諸行、結歸念佛一行、然尙彼經諸行文廣念佛文狹、是以行學之徒、義路易迷、是非難決、故今此經廢捨諸行、唯明念佛、是即爲於念佛行令生決定信也」とある。『淨土和讃』に「諸善萬行ことごとく、至心發願せるゆへに、往生淨土の方便の、善とならぬはなかりけり」とある。『高僧和讃』に「釋迦は要門ひらきつゝ、定散諸機をこしらへて、正雜二行方便し、ひとへに專修をすゝめしむ」とある。

終南、吉水、吾祖の相承は、的示廢立に始終してゐる。大體觀經は聖道誘引の經であつて、諸善萬行を定散二善に要約してもつて、往生淨土の生因に擬せられたところの巧みな方便をつかはれたものである。蓋し誘引は直ちに澁滯固化を意味するものではない。誘引に更に三願轉入の巧方便が自ら織りこまれてゐるものである。この消息は觀經に於て、はつきり出てゐる。即ちその流通に至つて、その本意を開顯して、上來所說の定散諸行を廢し、下品所說の隱彰の念佛をもつて附屬してゐる。この巧説になほ徹しないものは、九品の所明の相狀は諸行に堪へざる下三品の劣機がために易をねらひどころとした教示であるらしく考へる。そこにはまだ勝劣に約して行體そのものを廢立した所明であるといふはつきりしたお

ちつきに達しない。即ち勝劣廢立の極致を見失つてゐる。かうしたことから廢立の實相が隱覆されては、一大事だから、更に本經を説いて廢立を的示せられたものである。そこで本經の組織には深甚の注意をはらはれて、初に、廣く眞報土の種々の莊嚴相を讚嘆し、もつて廣略相入の眞涅槃たることを知らしめ、修因段に於ては先づ、眞報土を對象として、不可以少善根等とはつきり定散二善そのものを嫌貶して少善不生と判決し、念佛こそ多善即生であると開示した。而して後に、この事實に對して、釋迦は自證智見をもつて勸信し、更に六方諸佛は同時に舒舌證誠せられたものである。かうした深甚の考案のもとに初めて觀經附屬の廢立の眞意義を知らしめたものである。この點、全く支那釋家の思ひ及ばなかつた點である。これが終南、吉水、吾祖の相承によつて初めて顯開せられたものである。而もこの顯開こそ本經の教興の核心であつた。

この教興の核心たる的示廢立は更に大きな舞臺にまで擴められる。その一役は、本經の依正莊嚴段である。經文彼土何故名爲極樂乃至諸上善人俱會一處の文段にはまた深い構想を秘めてゐる。阿彌陀佛は一法句、依報は廣略相入であつて作用不可思議の境界である。かの變化所作は二十九種そのものである。先哲の



ことばを籍ると阿彌陀の一法句、即ち無上涅槃の妙果から鸚鵡などの衆鳥を示現して、法音宣流にあたらしめたものであるが、もとより依報のすべてもまた一法句示現の廣略相入、妙用不思議の莊嚴である。その正報たるや主伴不二機法一體、その嘉號妙用は、十方に流布し、具縛の凡愚を攝して速疾に光壽の妙域に契はしむるところである。これ全く諸佛不共、別願因縁の佛徳である。而してこの依正の一切を成就、如是功德莊嚴といふ力強い經文で結成してゐるところに、本經教興の重役を買つて出てゐるのである。即ち、願心莊嚴の妙土の開示によつて衆生をしてこの妙境界に入らしめんがためである。だから經文には身子を呼び、指方立相して種々の莊嚴を讚嘆せられたことには、無上甚深微妙の構想が秘められてゐるのである。

更に、果遂の願功を顯示する深意もまた教興の重大な役割をもつてゐる。『化卷』本に「阿彌陀如來本發果遂誓願也悲引諸有群生海」とある。また次上の文に「然則釋迦牟尼佛、開演功德藏、勸化十方濁世」とある。また『化卷』本に「言顯者經家嫌貶一切諸行少善、開示善本徳本眞門、勵自力一心、勸化十方濁世」とある。『淨土和讃』に「果遂の願によりてこそ、釋迦は善本徳本を、彌陀經にあらはして、一乗の機をすゝめけり」とあ

る。これら祖釋のこひねがふところを窺ふと、大體果遂の願本には始終二轉の妙用がある。その始轉の妙用とは、要門を豫想して、諸行に滯る機類をして、眞門念佛に轉入せしめんがための果遂誓願の妙用である。始轉の内容には甚だ複雑な手心を加へてゐるので、一應は對機に約して諸行を難とし稱名を易として、難易の問題を表顯してそこに自ら廢立を知らしめやうとせられた。それが即ち觀經下品の顯說所明である。更に反省が深められて、勝劣をはつきり表顯せられた法そのものについての廢立、それが即ち本經の顯說所明であつて、經家の嫌貶開示である。だが、この顯說所明はなほ從要入眞の始門の用に屬する。これに對して、終轉の妙用とは、眞門の念佛をして自然に利他の信海に入らしむる妙用である。『淨土和讃』に「定散自力の稱名は、果遂のちかひに歸してこそ、おしへざれども自然に、眞如の門に轉入する」とある。これ本經の職とするところである。さてこのうちにまた難易と勝劣との二態がある。先づ、難易の一態とは、眞門の念佛はなほ廢惡修善の分齊である。ために難の分域を出ない。この眞門念佛が一切の滯相から全脱した他力至易の念佛に轉入することが最初の而も最後の念願なのである。勝劣の一態とは、眞門行者は念佛の勝れる義は一應理解するが、なほかつ、能稱の機功に滯り、



自力の殘滓がある。従つて名號の勝徳を全領するまでに至らぬから弘願念佛に對比するとなほ劣位にあるべきものである。こゝに於て、今經には、自證智見を説き諸佛證誠三佛同入不可思議功德海の妙旨を開顯して、まさに、この眞門念佛を契機として不思議功德海に同入せしめんがためである。これを果遂の終轉、從眞入弘の妙用とするのである。この果遂の願意を豫想して今經開說の大業が成就したものである。第二十願開說より第二十願に滯留せしめなため、第二十願を捨てしめたものこそ今經の教興である。

かやうにして、或は機法の眞實を合説し、或は諸佛證誠を顯彰し、或は同入の妙旨を開示し、遂に一代結經として出世本懷たる極難信法を信受せしめんとしたこと、が本經教興の眞面目だらう。

## 二 宗 體 論

—附隱顯論

宗體論は一般佛教學の上に於ても重要な役割をもつものであつて、判教論の内包ともなるべきものである。宗とは宗要、體とは旨歸のことであつて、一經一論一部の宗要とその旨歸との問題である。

嘉祥の『觀經疏』、『法華遊意』上、『大乘玄論』などによると、宗體は名は異なるがその内容は同じ意味をもつてゐるとも、また、或同或異とも立てたやうである。淨影の『觀經疏』本などでは、宗を論じてゐるが體についてはふれてゐない。或は宗體は同義だとも考へたやうでもある。元曉の『大經宗要』によると、淨土の因果を宗體と爲すといつてゐる。また『小經疏』には宗のみについて論じてゐるから、恐らく、嘉祥や淨影の所論と同義だらうと思はれる。これに對して、宗體を別論する説にまた三家の不同がある。即ち天台家と慈恩家と賢首家とである。

天台家では、『法華玄義』八上『同上』九下などによると、名體・宗・用・教の五重の玄義を立て、諸法實相爲體、一乘因果爲宗と分けてゐる。『觀經疏』、『妙宗鈔』二によると、此觀經實相爲體、以心觀淨則佛土淨爲宗と立て、ゝゐるから、法華經・觀經ともに、諸法實相を體とし、觀察の因果を宗としたものであらう。かうした宗體論をまとめてみると、體は非因非果であり、宗は亦因亦果の所論であるとしたやうである。孤山・藕益・大佑・性澄の諸釋家の小經疏を見ると、その宗體論はすべて天台系に屬するものと見てよい。

禪家では、『六祖壇經』上に無念爲宗、無相爲體と立て、ゝゐるから、また、天台家に類



屬すべきであらう。

次に、慈恩家では、『成唯識論述記』一本已下に唯識教體論について詳論してゐる。旭雅師の『唯識名所雜記』一に『疏』『章』『對法抄』の意見を手ぎわよくまとめ、更に六塵教體論を名所づくし流のものに組立て、ゝゐるから参照せられたい。概説すると、體は能詮、宗は所詮と一應分別して、境無識有の理をもつて、斷惑證理する宗要を宗として、一切諸法の體については四重の體を立て、攝相歸性體、攝境從識體、攝假從實體、性用別論體が即ちそれであつて、また、經論聖教について體を明すと文體義體などの義を立て、詳論してゐる。もとより教體論は唯識學上の一名所となつてゐるものである。

次に華嚴家に於ては、『探玄記』一に能詮の教體、所詮の宗趣を明してゐる。華嚴家の宗體論については慈恩家との間にかなり複雑な交渉をもつてゐるが、この事情は旭雅師の『唯識名所雜記』にゆづることゝする。

さて、本經の宗體論については、諸家の間に異論にわたつてゐる。

天台の『義記』には、五重玄義の次第に則つて、第二に體を辨じ、第三に宗教を明したものであるが、元來實相爲體の觀點からの所論が本經のそれに及んだものであ

る。隨つて法性眞如即ち諸法實相をもつて本經體とし、往生の因果を本經宗としたものである。孤山『疏』もまた天台に准じて、方等實相を經體となし、信願淨業を經の宗致とした。性澄の『句解』、智旭の『要解』、大佑の『略解』などこの義を繼いでゐるやうである。慈恩の『疏』には、本經の宗體論の條下に於て、初に三部經と鼓音聲經とを部類の經として、これら四部經に通ずる通宗を明かして、淨土をもつて宗とし、特に本經の別宗を擧げて、斷疑證實をもつて宗としてゐる。なほまた、能詮の教體を判じてゐるから、所詮を判ずるときは宗ばかりの所判である。元曉『疏』には、宗と致とを分別して、本經は超過三界二種清淨を以てその宗とし、諸の衆生をして無上道に於て不退轉を得しむるをもつて意致とすといつてゐる。元照の『疏』は、今經に於ては彌陀の修因感化依正莊嚴不可思議功德をもつて所詮の理體とし、乃至今經は専ら持名の徳を示すをもつて經宗とするのだと説いてゐる。蓋し元照の疏釋は諸釋家中もつともよく淨土の宗旨を理解してゐるやうである。雲棲の『疏鈔』によると、本經は法性を宗とし、更にこれを開顯すれば依正清淨信願往生をもつて、宗致とすといつてゐるが、所謂唯心の彌陀己心の淨土を高調する基調となつた釋相だらう。元照の釋相は、雁門のそれと相似かよう點が少くないためか、



宗祖は『本典』に於て度々引用されてゐる。

次に今家相承の宗體論を一瞥してみたい。龍樹、天親二菩薩の上に於ては宗體の問題に觸れてゐないやうである。雁門は『論註』に以佛名號爲經體と説かれたが宗については言及してゐない。西河は『安樂集』に觀佛三昧爲宗とあるが體についてはふれてゐない。吉水もまた『三經釋』に宗のみを論じて體については述べてゐない。そこで、宗體并べ釋するものは終南と高祖とである。

終南は『玄義分』に於て、觀經の宗體を判じて、觀佛三昧爲宗、念佛三昧爲宗、一心廻願往生淨土爲體と念觀兩宗を立てられた。かやうに宗の外に體を別開したけれども、かの元曉の釋相と相似かよつた點がある。即ち往生淨土爲體と判せられたが、その所謂體は宗の別相に外ならぬ。といふのは宗はもとより修行の因果を明すものであるから、その果の様態をとつて往生淨土爲體と判せられたものである。だから、終南釋文の標文に辨釋宗旨、不同と標して、宗體、不同といふ文句を使つてゐない。この終南の釋相に對して、雁門は前述のやうに佛名號爲體として、體ばかりの釋判であるかのやうであるが、文義を深く窺ふと宗の義判もあつたことは、ききめて明白である。そこで、終南の宗體は二にして一、雁門の宗體は一にして二であ

るとすべきである。

さて、宗祖の上は、大經に於ては宗體を分別しての釋相である。但し、觀小二經に於ては、たゞ、宗のみの釋判である。就中、大經に於ける宗體の分判のよつて來るところは全く雁門の指南によられたものであらう。『論註』の開卷初に、釋迦牟尼佛在王舍城及舍衛國、於大衆之中說無量壽佛莊嚴功德、即以佛名號爲經體とある。王舍城及舍衛國と特に並べあげられたことは、所説の場處でもつて、能説の經を示したものだから、三經一致して、名號爲體とせられ、說無量壽佛莊嚴功德とはまさしく宗の義を述べられたものであらう。更に『論註』下卷に、彼清淨佛土有阿彌陀如來無上寶珠、以無量莊嚴功德成就帛、裹投之於所往生者心水。とあるが、全く上卷前引の文と同意義であつて、自らそこに宗體の釋判を窺ひ得る。

宗祖はまた大經の宗體と觀小二經の宗體とを一應分判せられたやうである。大經の宗體は『教卷』に、夫顯眞實教者、則大無量壽經是也、斯經大意、乃至是以說如來本願爲經宗致、即以佛名號爲經體とあり、また、『行卷』偈前の文に、凡就誓願有眞實行信、亦有方便行信、乃至大無量壽經之宗致、他力眞宗之正意とて本願爲宗を重ねて示されてゐる。



また、『三經往生文類』の初に、「大經往生トイフハ、如來選擇ノ本願、不可思議ノ願海、コレヲ佗カトマフス、コレスナワチ念佛往生ノ願因ニヨリテ必至滅度ノ願果ヲウルナリ、現生正定聚ノクラキニ住シテ、カナラズ眞實報土ニイタル、コレハ阿彌陀如來ノ往相廻向ノ眞因ナルガユヘニ無上涅槃ノサトリヲヒラク、コレヲ大經ノ宗トス」この御指示もまた『行卷』偈前の文と同意である。如來本願の因より願力成就の報土の果を得るといふ事實は、本よりいへば彌陀成佛の因果、末よりいへば衆生往生の因果、この二因果を明すことが本願の所詮である。これを即ち眞宗の教行信證眞佛眞土と名づくることの御釋である。

『選擇集』題下に宗體を擧げて、「南無阿彌陀佛體往生之業念佛爲本宗」ある。また、『讚阿彌陀佛偈』に南無阿彌陀佛釋名無量壽體とあり、その首讚に「現在西方去此界 十萬億利安樂土 佛世尊號阿彌陀 我願往生歸命禮」宗とある。これらの證文みな宗祖の宗體判を窺ふ尊き資料となるべきものである。

次に宗祖の觀小二經の宗體判を窺ふと、宗の外に別に體の分判はないやうである。『化卷』本に「三經眞實選擇本願爲宗也、復三經方便卽是修諸善根爲要也」とあるが宗と要とは同意である。『三經往生文類』に「觀經往生トイフハ修諸功德ノ願ニ

ヨリ、至心發願ノチカヒニイリテ萬善諸行ノ自善ヲ廻向シテ淨土ヲ忻慕セシム、乃至觀經ノ宗トス」また、『同文類』に「彌陀經往生トイフハ、不果遂者ノ誓願ニヨリテ植諸徳本ノ眞門ニイル、諸善萬行ヲ貶シテ少善根トナツケタリ、善本ノ名號ヲエラヒテ多善根多功德トノタマヘリ、乃至彌陀經ノ宗トス」とある。これらの御釋はいづれも顯説の宗を述べられたものであつて、體については言及されてゐない。その所謂體については明かな御指示がないから、更に隱顯釋の御指南から窺はねばならぬ。もとより觀經には隱顯があつて、その隱彰の實義をいへば大經と同じく、名號爲體、弘願念佛往生因果爲宗であり、また、その顯説の義によると定散二善をもつて體とし、息慮凝心廢惡修善の假因假果を宗とするのである。小經はまた准知隱顯であつて、『一卷鈔』の「難思往生彌陀經宗」との御指南は顯説の宗であり、二十願の行信、難思往生の宗趣である。『化土卷』本の「所謂三經眞實選擇本願爲宗」とは隱實の宗であつて、選擇本願の行信を宗とし、難思議往生を宗趣とするのである。その體についていへば眞實の隱宗に局つて方便の顯宗には通じない。即ち眞門の機は本願の嘉號を自の善根とするから修諸善根の稱名となり、法體名號の勝徳を逸し、能稱の功を往因に擬するのである。従つて修徳顯現の名號實相に契はないか



ら、その體名號實相とはいへない。だから、顯說當分では唯宗無體、それが弘願に轉入するに至つて、初めて名號實相法に契ふことになるから、一實圓滿の眞教となり、眞如一實之功德寶海となり、本願一乘絶對不二の因果となるのである。

序に隱顯について問題の所在を明にすれば、由來佛典の解釋には嚴肅なる方軌がある。『智度論』一の四悉檀を天台家では釋經の方規のすぐれたものとして重大に取扱つてゐる。眞諦譯『攝大乘論』玄奘譯『攝論』中には三相をもつて大乘法の釋方とすべしと説き、更に四意趣、四祕密をもまた釋方としてゐる、これらを初め、六合釋八轉聲などみな佛典解釋の方規を示したものである。今この隱顯の釋相もまた方軌の一種である。相承の上には觀小二經を解釋するに隱顯の方規を立て、その正意を開顯したものである。而もこの隱顯の方軌を用ひたことは今家不共の明斷であつて西鎮等の釋家の窺ひ及ばざるところである。

蓋し隱顯の方軌を採用して佛典解釋に資したものは、古くは『智度論』四に「佛法有二種一者祕密二者顯示」と説いてゐる。これは菩薩藏と聲聞藏との評釋に用ひたものである。また、『解深密經』二、『瑜伽論』七十六の三時教論には第一時教第二時教をもつて、未了義隱密の釋相とし、第三時教をもつて顯了無容眞了義の教相と

判じてゐる。その隱密の釋相とは、一色一香無非中道の了義をかくして、或は依他起性の一邊に約して説き、或は三無性或は遍計所執性の一邊に約して説いたものである。その顯了の教相とは、三性三無性の妙相を圓かに説き開き中道の眞義を顯示したものである。また、圓暉の『俱舍論頌疏』にも、世親著論宗旨有兩種、一者顯宗乃至二者密宗とあるが、『麟記』に「顯即彰顯乃至密謂隱密」と註釋を加へてゐる。かうした釋例も外に多々あることゝ思ふ。

ところで、今家の隱顯釋は、如上の智度論乃至瑜伽論などを釋例としたものではなくて、正しく善導の指南によつたものである。終南は明に觀經に隱顯ありとは示されてゐないが、觀經の判釋に觀佛三昧爲宗念佛三昧爲宗と兩宗に明分して古今指定められたところに自ら隱顯の釋判が窺はれるので、宗祖はその終南の深意を探ぐつて觀經に隱顯の釋判を用ひられて、『化卷』本に「依釋家之意、按無量壽佛觀經者、有顯彰隱密義」と釋されたものである。本經に於てもまた『化卷』本に「准知觀經此經亦應有顯彰隱密之義」と判釋せられた。

顯說は『觀經』に於ては定散諸行往生の要門の法義であり、『小經』に於ては、自力念佛往生の眞門の法義である。即ち方便說である。隱彰は、兩經ともに他力念佛



往生の弘願門の法義である。『六要』は顯彰の二義とし、『駕説』は顯密と隱彰との二義とし、『笑螂臂』は顯と彰と隱密との義とし、僧撰の『顯彰隱密義』には、顯と顯彰、隱と隱彰との四義として密はこの四に蒙るとした。僧鎔、柔遠は『六要鈔指玄録』顯と彰と隱との三義とし、密はこの三に及ぶとし、道隱の『教行信證略讚』には、顯と彰と隱と隱密の四義とし、慧雲の『教行信證義例』に判目四、義相三、法體二、旨歸唯一として詳説してゐる。寶雲の『本典好密』には、隱彰と顯との二義で密はこのうちに含んでゐるとし、正に異論百出であるが、その元意に於ては同義である。陳善院の『顯彰隱密義』はこの問題に適正な解決を與へてゐる。

更に觀經の隱顯と小經の隱顯との所明の間にかなりのへだたりがある。觀經の説相を窺ふと、序分正宗に説くところの佛身佛土のすべてに隱顯がある。もとより佛身については、『化卷』本に、言諦觀彼國淨業成者、應觀知本願成就盡十方無碍光如來也」と釋成されたが、これが正しく佛身について隱顯をわかれた釋相である。定善觀門所見の彌陀は方便化身なることは明白である、然るに化卷釋は盡十方如來として隱義の釋相を用ひられた。また、佛土についても、『化卷』の初に、謹顯化身土者乃至土者、觀經淨土是也」とあるは、顯義は方便化土、隱義は眞實報土と示さ

んがためであつた。これに對して小經の説相に於ては淨土を化土と判せられた證文がない。『三經往生文類』に小經の難思往生を説かれたところに、大經の疑城胎宮に生ずと釋されたことは、やがて小經顯義の難思往生淨土は正しく大經所談の化土であつて、小經所説の淨土は眞實報土と取扱はれたものと窺ふべきである。ひるがへつて、小經正報段の主莊嚴たる彌陀は光壽二無量であつて、宗祖の『眞佛土卷』に明すところの光壽無量の眞報身であるべきである。従つて、次下所明の極樂の聲聞衆も菩薩衆もまた眞報土の聖衆莊嚴である。よつて、本經の依正二報は、唯弘願門の所談である。たゞし、衆生生者より若一日等の一段は、眞門と弘願門との二門に通じて隱顯の二義を立てたものであらう。かの『化卷』の隱顯釋はまさしくこの一段について立てられたものである。六方の證誠は唯弘願に約し、已今當發願の利益の所説は、眞弘兩門に通じて隱顯の釋相を用ひられたやうである。「如我今者稱讚諸佛以下出世本懷段に於ては、また唯弘願門の見地に立てられたものである。こゝに、觀經の説相と異つたところがある。よつて、准知隱顯と判せられたものであらう。

以上、隱顯義の大要であるが、宗體論と隱顯義との關係は既にほゞ論じつくされ



たと思ふが、智暹の『展持鈔』二に三經宗體隱顯同異の事の條下にこの消息をはつきり解釋してゐるから參照されたい。

さて、今家本經の宗體論について結ばねばならぬ。ところが、前述の通り本經宗體問題については宗祖師釋に定判がないために、先哲識見の間に區々の論議がある。これがまた、宗學興隆の思はざる結果を將來したこともなつた。『駕說』一によれば兩宗を立て、顯宗は二十願、隱宗は弘願三經一致であつて、また名號爲體であると判じてゐる。蓋しこの義は三經の通宗通體論であつて、本經の獨特な風格はあらはれてゐないやうに思へる。

『聖淨決』上に「今付屬流通をもつて宗と爲し、名號をもつて經體と爲す」と判じたが、この主張は古來西山家に用ひた説であつて、かの堯慧の『私集鈔』上に「この一軸は全く觀經の流通なり」とある。即ち本經の一部始終すべて觀經の付屬流通であるとの意見である。

『法事讚甄解』五には、宗に二種ある。若し顯說に約すると第二十願の行信をもつて宗とし、方便化身土難思往生を以て趣となす。また、隱彰の實義に約すると、三經一致の義であつて、選擇本願の行信をもつて宗とし、眞實報土難思議往生をもつ

て趣となす體については、三經通じて佛の名號をもつて經體とすとし、この所詮の法體の外に能詮の教體の一門を立て、釋してゐる。この意見を襲踏したものは、明教院『受信錄』、淨信院『增明記』である。『弊帚錄』は、證誠を宗とし、名號を體とすと釋してゐる。

『弊帚錄』を更に詳細に讀むと、證明讚嘆付屬流通を宗とすといつてゐるやうである。今家『化土卷』、『文類聚鈔』に於て、執持一心を宗としたやうであるが、これは且く顯說に約して、自力稱念の方便に寄顯したものであるから眞實の宗要としたい。ところが、名號弘願の法體は本來稱念及び證誠の徳用を具するものであるから、方便の相を兼ねる稱念の相をとらないで、たゞ、諸佛證讚の眞實をとつてもつて宗とすべきだと高調してゐる。この『弊帚錄』の意見は至極もつともではあるが、若し證讚を宗とするほどなれば一切諸佛所護念經と經題してゐるから、亦、護念をも宗とすべきである。

惠空の『義要』上本には、觀經の兩宗に准じて本經もまた、隱顯の兩致を存すべしとて、顯の義の宗は善本の名號を顯はすを宗とし、隱の義の宗は弘願の信心を顯はすを宗とすと釋してゐる。蓋し本經の體について何等の判釋もないことはどう



したものだらう。更に宗についても、弘願信心を爲宗と釋してゐるが、化卷に既に選擇本願爲宗との祖判があるのだからそれをそのまま繼承すべきである。こゝに於て慧琳は『護念錄』上に兩宗一體として、即ち善本徳本を以て宗とし、また選擇本願を以て宗とす。一心に執持して淨土に往生するを體とすと『義要』の所論を擴充してゐる。

如上の諸説は眞宗學界に於ける代表的なものであらう。思ふに祖釋『化卷』本の嫌貶開示の段、また『大經讚』の「果遂の願によりてこそ」等の一首、また『化卷』本の善本徳本の文、また大經第二十願文、また智慧段の第二十願成就文、また襄陽の石經、これらを資料として、顯義の宗論を窺ひ、更に『化卷』本の「三經眞實選擇本願爲宗」の文、『同上』「光闍不可思議願海」等の文によつて隱義の宗論を探り、また『玄義分』の「一心廻願往生淨土爲體」の文等によつて體論を搜つて、體の上にもまた隱顯二義あることを知ることが出来る。

### 三 一代結經論

附無問自說

『選擇集』上に法華の三部、大日の三部、鎮護國家の三部、彌勒の三部を例として彌

陀淨土の三部をあげてゐる。ところが淨土の三部の説時については古來の宿題である。蓋し觀經は阿闍世王の逆害に縁つて興つたものであるから、阿闍世王の年代と逆害の事實を推定すれば自らその説時も明瞭になるわけである。

阿闍世王に關する資料は藏教中にかなり多い。嚴密な史的研究の成果を望むことを差控へて、古來の註疏釋の指示するところを一應まとめてみよう。『善見律毘婆沙』<sup>二</sup>には、爾時阿闍世王、登王位八年、佛涅槃等と傳へてゐる。即ち阿闍世が逆事を行つて王位に登つたのは釋尊入滅の八年以前であつたといふことだから、この傳説によると觀經の説時もまた佛入滅前八年と測定できる。然るに、『北本涅槃經』三十三によると、善男子、我知是事故告阿難、過三月吾當涅槃、善見聞已、即來我所、我爲說法、重罪得薄、獲無量信、と傳へた。闍王、父王を幽閉するに及んで父王七日を過ぎて死去した、闍王後悔の念にかられて佛處に至る時、佛入涅槃前三月に當るといふことだから、闍王の逆罪は法華以後、涅槃以前と見てよい、隨つて觀經の説法もまた法華の後、涅槃の前と推定せられる。

佛陀時代に於ては中央印度の憍薩羅國を舍衛城に都した波斯匿王が治めてゐた。また摩竭陀國を王舍城に都した頻婆娑羅王が統べてゐた。佛陀の晩年に



は政事中心も變革があつて、波斯匿王のあとを毘瑠璃がついで間もなく衰頽した。摩竭陀は阿闍世の逆害で王位を奪はれた。この王朝は數朝つゝいたが、後難陀王朝のために亡ぼされたやうである。

阿闍世に關する資料は漢譯經律中には甚だ多い、『長阿含』二、十七、『五分律』三、『增一阿含』三十二、三十九、四十一、『涅槃經』梵行品、『大寶積經』百〇六、異譯大經、『平等覺經』、『大阿彌陀經』。

次に、大觀の次第について既に支那の釋家の間に異論百出してゐる。慈恩斷疑證實の理よりは、大觀次第であるが事をもつて推驗すると觀大次第であると立てゝゐる。憬興(大經疏に三義を立て觀前大後とす)龍興(觀經疏に二義を立て)など觀前大後論であり、玄一(大經疏に龍興の義を評破す)迦才などは大前觀後の説である。望西樓鈔一に古説を列擧す。然るに漢語燈錄觀經釋に三文一理をもつて大前觀後論を高調せられた。

一華座觀文云、法藏比丘願力所成、意云、壽經先説彼願、今指彼云願力所成、乃知壽經是先、今經是後也。

二中輩下生文云、亦説法藏比丘四十八願、其義同上

三雙卷經上文云、阿難白佛、法藏菩薩、爲已成佛而取滅度、爲未成佛、爲今現在、佛告阿難、今已成佛、現在西方、去此十萬億刹、其佛世界、名曰安樂云云。今經具説彼土依正二報、今經若先、彼經何有此語、故知壽經是先也。

次理者、壽經先説彼佛發心修行、及果上依正二報、今經卽就彼經所説依正、説此十三觀故、知壽經是前此經是後也。

更に先哲の意見を、この觀經釋の三文一理の上に附加してみると、教證には、

四、大經下有二菩薩、最尊第一、威神光明、普照三千大千世界、阿難白佛、彼二菩薩、其號云何、佛言一名觀世音、二名大勢至、この文相によれば、始て二菩薩の名を説かれたや、これまた大前觀後の文證である。

五、大經下次の文に、是二菩薩、於此國土修菩薩行、命終轉化、生彼佛國、——觀經是二大士侍立左右——大經は二大士を往相に約して説き、觀經は還相に約して説いたものである。これまた大前觀後の文證である。

六、大經上、八相成道の文、法藏の發願修行修因感果を具説することもまた大前觀後の文證である。

次に理證は、『觀經釋』の上に更に理證をあげると、『散善義』に「上來雖説定散兩門之益、望佛本願、意在衆生一向專稱彌陀佛名」と示したやうに、卽ち觀經の附屬持名は



經の説相によれば持名をもつてしては附屬しがたいやうであるが、大經の選擇本願に望めて定散を廢して持名を選擇附屬せられたものである。この點より見てまた大前觀後の次第であるとせねばならぬ。

また、元祖の三經釋に於ては、大經釋に來意を立てず、觀小二經について來意を立てられた。これまた大觀次第論の理證ともなり、文證ともなるものであらう。

次に觀小前後については、教證をいへば、觀經附屬に「汝好持是語等」を説き、この附屬持名を承けて小經修因段に於て「執持名號」と説かれたものだから、觀前小後であるとせねばならぬ。

理證としては、觀經に廣説されたる諸行を小經に來つては「不可以少善根」と直接に諸行を廢してゐるから、觀小の次第とせねばならぬ。

『口傳鈔』下に「三經の説時をいふに、大無量壽經は法の眞實なるところをときあらはして、對機はみな權機なり、觀無量壽經は機の眞實なるところをあらはせり、これすなはち實機なり、いはゆる五障の女人韋提をもつて對機として、とをく末世の女人惡人にひとしむるなり、小阿彌陀經は、さきの機法の眞實をあらはす、二經を合説して、不可以少善根福德因緣得生彼國」とける、無上大利の名願を一日七日の

執持名號にむすびとめて、こゝを證誠する諸佛の實語を顯説せり」とある。

『改邪鈔』に「三經ともに差別なしといへども、觀無量壽經は機の眞實をあらはして、所説の法は定散をおもてとせり。機の眞實といふは、五障の女人惡人を本として、韋提の對機としたまへり。大無量壽經は深位の權機をもて同聞衆として、所説の法は凡夫出要の不思議をあらはせり」とある。

兩鈔の文、一家の高判であつて、三經を窺ふ指針である。兩鈔ともに示すところは、法實を本とし、この法實の正爲たる機實を選ぶからして、法實を先とし、機實これにつき、最後に機法相會して得脫掌に在るから、合説證誠したものである。この意味に於て小經は最後に在つて二經を結成するものであるとの高判である。

また『法事讚』に「世尊説法時將了、慇懃附屬彌陀名」と、これ近くは三經の結經といふ釋相であつて、三經一致の義門に約した説相である。また、三經差別の義門よりすれば、大經は第十八願開説の根本法輪、觀經は第十九願開説の枝末法輪、小經は第二十願開説の攝末歸本法輪である。大經は根本法輪たるの故をもつて、一切の法義を蘊藏してゐる。即ち、三輩は既に觀經の素因を示し、經末の無過斯難の文は小經の起由となつてゐる。觀經は聖道一代教を攝して定散二善に統べ、小經に至つ



ては、嫌貶開示して、諸善を廢し持名に歸せしめた。然るに、なほ機計を帶するものもあるから、更に諸佛の證誠によつて、遂に不可思議功德海に入らしめたものである。而して、この不可思議功德海は、即ち大經所説の選擇本願海であること知るべきである。次に『法事讚』文によつて更に一步進めて、本經は實に淨土教の結經たるにとゞまらず、廣く一代佛教の結經であるとの所論がある。この問題ももとより、『口傳鈔』存覺上人の選擇集の『註解抄』等の指南から生れてくるものである。『口傳鈔』に、これによりて、世尊說法時將了とて釋します、一代の説教むしろをまきし肝要いまの彌陀の名願をもて附屬流通の本意とする條、文にありてみつべしとある。

『註解抄』に、『法事讚』文は、今のぶるところの義を釋するなり、世尊說法時將了といふは、彌陀經の説時をはるといふ計にはあらず、廣く一代諸教の終りに此經を説き給へりと顯はす意也とある。まさしく『法事讚』の意により本經は一代佛教の結經であると釋せられたものである。蓋し一代結經の意義と語義とについては、なほ一應の吟味が必要である。

元來『法事讚』下二十丁の「世尊說法時」等の文は、『選擇集』『彌陀經釋』によると、本

經の「佛說此經已舍利弗及諸比丘一切世間天人阿修羅等」の文を釋したものである。經文「佛說此經已」の「此經」は、彌陀經であることは現文分明である。ところが法事讚釋の世尊說法とは、いかなる說法であるか、古來異論にわたつてゐる。鎮西系では彌陀經の說法だといひ、西山系は一代佛教を指すのだと主張したやうである。今家では、『口傳鈔』などは一代佛教を指すものとしたやうである。『口傳鈔』などの釋相は讚主善導の素意を探つて、その深意を開顯したものである。凡そ讚文一部を通覽するに、本經證信序の讚文に本經の教興について詳論してゐる。その所論の中心點は、一代教は彌陀經の序分であるといふところにある。また讚文に「釋迦如來成正覺、四十九載度衆生等」とある。これまた本經説時を明に示して、鶴林涅槃に臨むときといふことである。かうした讚文の深意を窺ふてみると、世尊說法時將了とはまさしく一代說法時將了の意である。同讚文に「世尊慰勸告身子」とは本經一部の説相はねんごろに舍利弗に彌陀の名號を附屬して、遠く遐代に流通せしものなることを示したものである。

蓋し、大經は不可思議の願海を光闡して、法實佛智不思議の誓願であり、權實二智相即の智願海である。この意味に於て、實智の故に無前無後、而も權智の故に時節



宛然たるものがある。だからいたづらに凡情をもつて時節を確執してはならぬ。法華以前にあつてもそのことが大經の價値を割引するものでもなく、況や、法華は光闡道教の方便教であるから、たゞに時間の前後にかゝはらぬものである。これに對して觀經はもとより調誘攝化の經相だから、今家相傳して法華同時と取扱はれた。『出世元意』、『法華問答』等はその邊の消息が窺はれる。小經に至つては觀經の後なること自明の事實なれば論をまたぬ。『展持鈔』にこの邊の消息を詳細に問答してゐる。『弊帚錄』に迦留陀夷問題を論じて結經たる證據としてゐる。蓋しこの問題は輕々に斷定するわけにはいかぬ。

更に一代結經論について出世本懷と無問自說との問題を添加すればその意義が一層明瞭になると思ふ。

高祖は『化卷』本に「斯經大乘修多羅中之無問自說經也、爾者如來所以興出於世、恒沙諸佛證護正意唯在斯也」とあり、又『一多證文』十五丁「この經は無問自說經とまうす、この經をときたまひしに、如來にとひたてまつる人もなし、これすなはち釋尊の出世の本懷をあらはさんとおぼしめすゆへに無問自說とまうすなり」とある。また、堯惠の『私集鈔』上に「設無問自說誠諦教、顯六方證誠護念益乃至今此一軸者、全

是觀經流通、亦即一代結經者乎」とある、今家、西山は遠く支那の釋家の意見を襲踏したものであつて、『天台疏』に「此經命章對舍利弗、餘經皆有請主、此經無問自說」と、また『元照疏』上には「此乃十二分教、無問自說之經」とある。即ちこれによつて、古來、本經は無問自說の經とされ來つたのである。

序に十二部經とは *Dvādaśaka-dharma-pravacana* の舊譯であり、新譯では十二分教となつてゐる。即ち佛所說の經典を其内容又は形式の不同あることから、十二種に分類したものである。新譯家が舊譯の十二部經を十二分教と改め譯した理由については、『大乘法苑義林章』卷二本に「先德は翻じて十二部經と爲す。但た部の言義に二種を含むを以てなり。一には謂はく部秩、二には謂はく部類なり。世人は十二の部秩ありと謂ひ、經の名も亦濫じて總別明らめ難し。今翻じて十二分教と爲す。分とは類の義、支の義、段の義、教の義なり。前の如きの教に十二の義類と支條と分段との異あるが故に即ち帶數釋なり」と云ひ、又『華嚴經疏』第二十四にも「舊には十二部經と名づく。部秩と濫するを恐れて改めて分教と名づく」と云ふ。

一に修多羅 (Sūtra) とは經、契經、或は法本等と譯す。即ち總じては一部一經に名



づけ、別しては直説せる長行のことで散文である。  
二に祇夜 (Geyā) とは應頌、又は重頌等と譯す。即ち長行直説の義を重ねし頌を以て説示し、或は長行中の未了義を補釋宣説するをいふ。  
三に和伽羅那 (Vyākaraṇa) とは授記、授決又は記別等と譯す。即ち或は弟子の生死因果を記別懸記し、或は菩薩の後に成佛すべきことを記するをいふ。  
四に伽陀 (Gāthā) とは頌又は不重頌、孤起等と譯す。即ち直に偈をもつて其の義を説くことである。

五に優陀那 (Udāna) とは自説、又は無問自説等と譯す。即ち衆の請問を待たず、佛自ら直説する形式である。

六に尼陀那 (Nidāna) とは因縁、又は縁起等とも譯す。即ち衆の請問に應じ、乃至種々の因縁に遇ひて説法することである。

七に阿波陀那 (Avadāna) とは譬喩、又は解語と譯す。即ち譬喩をもつて法義を説いたことである。

八に伊帝曰多伽 (Iṭṭhitaka) とは本事、又は如是語等と譯す。即ち本生を除きて餘の前世のあらゆる事を宣説し、或は結句に如是語ありてその所説を竟るものをいふ。

をいふ。

九に闍陀伽 (Jataka) とは生又は本生等と譯す。即ち佛の前世に於ける種々の大悲行を説くをいふ。

十に毘佛略 (Vaiṇulya) とは方等、又は方廣等と譯す。即ち廣大平等の理義を宣明するをいふ。

十一に阿浮陀達磨 (Abhūta-dharma) とは未曾有法、又は希法等と譯す。即ち佛及び諸弟子等の希奇の事を説けるをいふ。

十二に優波提舍 (Upadeśa) とは論議、又は義等と譯す。諸法の體性を論議決擇してその義を分別明了ならしむるをいふ。

十二分教については慧遠の『大乘義章』一至相の『孔目章』二、慈恩の『義林章』二本參照

無問自説の形式は、諸經典の中に於ても一品一會一事については往々見受けるところであつて、かの法華經の如きも、或は一分この形式を用ひられた。即ち法華は唯佛與佛の境界であつて、たゞひとり説く場合があるから自説といはれるのである。蓋し、法華の序分などを見ると、放光地動等の奇瑞を現はして説法の發起因



縁ともなることがあるが、阿彌陀經に於ては、放光地動などの發起因縁もなく、たゞ佛自ら舍利弗を三十五回もよびかけてゐる。舍利弗は智慧第一とさへいはれた佛弟子であるにもかゝはらず、更に一言の述ぶるところなく、唯々諾々として、その説法をきゝ入つてゐる。これ他經の無問自説の形式とは自ら特異なものであつて、鶴林涅槃に臨んで、弟子の請問をまたずして自説せられたところに、特に深い意義を認めねばならぬ。これがやがて佛隨自意の出世本懷の説たることを顯はすものである。

出世本懷を説く經文は少なくない、或は『華嚴性起性品』第三十四卷に「如來應供等正覺、性起正法不可思議、所以者何、非少因縁成等正覺、出興于世、以十種無量無數萬千阿僧祇因縁、成等正覺、出興于世」とある。或は『法華方便品』に「諸佛世尊唯以一大事因縁故出現於世」とある。また『大般若經』五百五十一卷に「其深般若波羅蜜多爲此故出現世間」とある。これらの經文みな出世の本懷を説いたものとせねばならぬ。よつて、たゞに彌陀本願念佛ばかりが出世本懷ではないともいへる。こゝに於て、本經無問自説が重大な意味をもつことになるのである。即ち華嚴法華等は、法身の居士を所對とする文殊普賢の如きものゝ華嚴の會座とか、また、二乘開會の

法華の機類に對しての出世本懷である。然るに本經は佛一代結經として末代濁惡不善の衆生の爲に無問自説し、出世本懷たる彌陀名號法をもつて「我見是利、故説此言」と釋尊の自證體現を披瀝して慇懃に舍利弗に付屬したものである。

次に横川の『阿彌陀經略記』に「問教有十二此經幾具、答略說道品念佛方法、隨業往生及佛依正乃至一經始終無問自説等」とある。即ち、本經中五根五力等三十七科の道品、三寶道念の文、隨業往生、及び佛の依正などを説いてゐることはすべて十二分教中修多羅に部屬すべきであり、また、不退轉往生極樂を説くは授記に部屬すべきであり、また、一生補處諸佛の供養、佛の壽命無量等は大乘教に限つた説相であるから方廣の部に判すべきであり、また、寶樹寶林の音聲等は譬喩であり、天雨妙華、水鳥法音等は未曾有にあたる。もとより本經の始終は無問自説であるが、微細に驗すると十二分教中七部も他の多くの部教が混入してゐることを詳細に開示したものである。

蓋し、本經の無問自説は別途不共のものである。そのうちには十二部經の様々な型態はあつても、すべて無問自説に統攝さるべきものである。元照の釋を依用せられた宗祖の深意は、無問自説をもつて本經の出世本懷を示すところに別途不



共を顯開せられたやうである。而もこれによつて、更に大經所說の出世本懷を重々開顯して、凡そ出世本懷中の出世本懷は本經所說の本願一乘であることを無問自說をもつて顯示せられたものである。

以上本大兩派先哲の註録をまとめて如上の一代結經論を概觀した。なほ、大觀二經の出世本懷の上に本經を出世本懷とせられた所以については、香月院の『講義』に詳説してあるから参考せられたい。

#### 四 樂 依 正 論

##### 一 依 報 論

經文「從是西方過十萬億佛土有世界名曰極樂」と從是西方とは指方立相であつてこの娑婆に對してかの嚴淨國土を辨立したものである。もとより彼此淨穢の差別がある。

『法事讚』下「一切佛土皆嚴淨、凡夫亂想恐難生、如來別指西方國從是超過十萬億」と從是の釋に一切佛土等の三句の釋を擧げられたことに深意が存するので、此三句には古來三雙の釋體があるといはれてゐる。即ち一は通別一雙であつて、一切佛土等は通であつて、如來別指等は別である。——このことは安樂集上第二大門中第二破異邪執問答のうち「十方隨願往生經」の「十方佛土皆爲嚴淨、何故諸

經中偏歎西方阿彌陀國往生也等」の文を引 二は難易一雙である。凡夫亂想恐難生とは難であり、證せられたところを参照せねばならぬ。 三は生佛如來指西方とは恐難生に對する凡夫易往の教示であるから易である。 一雙である。 觀經は光臺に十方佛土を現じもつて韋提をして選ばしめたのである。 觀經は如來直說の從是西方である。 即ち觀經は隨他の法門であるから、定散諸行を說示し、機の堪ふるところに從つたと同時に、淨土に於てもまた機をして選ばしめたものである。 ところが本經は故使如來選要法である。 かうした三雙の所由をもつて從是西方の結論が生れたものだとの釋意である。

さて、指方立相といふ命題には豫想をゆるさないほどの多くの問題が含まれてゐる。——指方立相といふ名目は、『定善義像觀釋』に出てゐる——

『大經』に「法藏菩薩今已成佛、現在西方去此十萬億刹」

『觀經』に「得生西方極樂國土」

『小經』に「從是西方過十萬億佛土、有世界名曰極樂」

『大經』に「恢廓曠蕩不可限極、悉相雜廁轉相入間、光赫焜耀微妙奇麗、清淨莊嚴超踰十方」

『淨土論』に「觀彼世界相、勝過三界道、究竟如虛空、廣大無邊際」



三經一論の上に於て既に問題がある。大體佛教説の態度には悲智兩門がある。爲物大慈方便法身の別徳によれば在、西、示、現、小、但、是、暫、隨、機、との説示であらうし、二十三光壽の覺體たる智慧無爲法身即ち方便法身を全ふする實相身によれば廣大無邊周遍法界である。『淨土論』の觀彼世界相は邊であつて、究竟如虛空等は無邊である。もとより西方淨土の本質は邊即無邊である。衆生よりすれば、邊より入つて無邊に達し、佛よりすれば、無邊を全ふじて邊を示現したものである。

よつて終南は極樂無爲涅槃界と釋し、無上涅槃處にして而も一乘緣起の法であるから、邊無邊相障礙せず、西方に即して周遍法界、周遍法界を全ふじて即ち西方である。この消息は賢首の『探玄記』三に蓮華藏世界についての問答釋格に類同してゐる。

不壞邊而恒無邊、不壞無邊又恒邊也、謂若無邊乖於邊、邊乖於無邊、是情計所變法、非正緣起、邊無邊是一事故並超情計

この釋格は華嚴一乘教學の根本的立場を表現してゐるものである。蓋し、今この釋格を抄出した意味は華嚴教學の蓮華藏界は直ちに彌陀の淨土と同格であるとか、その本質に於て兩土相類同するものがあるといつたやうな獨斷を論成する

ための資料としたものではない。たゞその釋格が彌陀淨土の邊無邊相即を表示するに參考になるだらうとのことに外ならぬ。彌陀淨土はもとより悲智不二の眞實報土であるから、邊即無邊であつて、在、西、示、現、小、といつても廣大無邊際といつてもそれは決して別個の土體を區別してゐるものではない。在、西、示、現、小、の報土は常に凡夫情計を超脱せる邊であるから、邊にして邊に滯らざる邊であり、邊即無邊の邊である。同時に周遍法界もまた無邊に留まらざる無邊であるから、契性超情の無邊である。

さて、經文の西方は正に凡夫情計を超え、無邊に邊を、無方に方を顯示したものであるが、その西方として示現せし所以についてまた幾多の問題がはらまれてゐるだらう。

『安樂集』下、答曰、以閻浮提云日出處名生沒處名死、藉於死地、神明趣入其相助便、是故法藏菩薩願成佛在、西、悲、接、衆、生、とこれは一往の勸門に約されたものだらう。

この點について一度考へ直してみたい。西方は宗教の立場におかるべきものである。西方は「超」の性格を本質必然的にもつてゐる。だから歴史的、社會的、現實在の如何なる體驗からも演繹さるべきものではなからう。純眞な宗教的體驗を



なんらかの型に擬宜し分析しようとすることは最も危険なことである。西方といふ意識は、學問や概念や行爲などに表現せられたためにそこに始めて自分のものになるといつたものではない。卒直にいへば、浮世との訣別とでもいはうか、兎に角、外的化或は客觀化にひきずられて自覺したり向上したりするものとは、その體驗様態を根本的に異にするものであらう。だから西方といつても表現的な自覺の世界ではない。寧ろ表現的な自覺の限定を超越するものである。

世俗の君子の質問に「念力ひとしくをよばれず」と答へられた鸞師の識見は、所與的表現を媒介として自分自身を自覺したものであらう。西方はたゞ宗教的體驗に於てのみ自證自覺され得る超越的な世界である。あらゆる自律的なもの智識的人格的な價值内容を、無にひとしからしめる絶對的價值の體驗である。この意味に於て西方意識内容には相對的自由の態度は許容されない。無論、西方も一應は生の表現ではあらうがそれはやがて、無限なるもの超越的なものとして體驗自覺せらるべきものである。

翻つて西方の概念内容、理論的反省といつたことを考へると一種の形而上學でもあらう。こゝに古來の先哲によつてやかましく論せられねばならぬ所以もあ

つたのだらう。南閻浮提に居した釋尊の指方であるから、従つて他方世界から指方すれば必ずしも西方とのみには限られない。それが東であらうが西であらうが邊即無邊の眞報土なのである。がしかし、宗教の立場において西方を見た場合は必ず西方であるべきことはいふまでもない。

所論は意外に獨斷に陥入つたやうで師友の叱正を受けねばならぬが、次に經文「過十萬億佛土」とはどういふ意味だらうか。

『平等覺經』に「所居國名須摩提、正在西方、去是閻浮利地界、千億萬須彌山佛國」

『大阿彌陀經』に「所居國土名須摩題、正在西方、去是閻浮提地界、千億萬須彌山佛國」

『無量壽經』に「現在西方、去此十萬億刹」

『如來會』に「西方去此十萬億佛刹、彼有世界」

『莊嚴經』に「現在西方、去閻浮提、百千俱胝那由他佛刹」

『異譯小經』に「於是西方、去此世界、過百千俱胝那度多佛土」

過十萬億佛土とは淨土の去程を擧げたものである。過とは超過の義であり、十萬億とは所超過の土である。これについて藕益の經疏には單に算品の相違に過ぎないその實は符契すといつて、『觀念法門』を引證してゐる。『往生要集』下末に



詳釋がある。こゝに引證された智光の論疏は古い資料として大切なものである。更に『駕説』『義要』等古哲の詳釋を參照せねばならぬ。

この命題にもまた問題がある。即ち『安樂集』の境次相接がそれである。境次相接論については古來風俗相接と境界相接との兩説があるやうである。この點また諸註録を參照されたい。

更に依報論には、廣略相入、國界無邊、境次相接等幾多の問題が残されてゐる。

## 二 正 報 論

經文「其土有佛號阿彌陀今現在說法」正しく正報を明すところである。「今現在說法」とは本佛口業說法である。「號阿彌陀」とは正報の主を標したものであつて、所歸所讚所說悲智願行の體を知らしめたものである。號とは果號であつて、法藏願行の感報阿彌陀の果號を成じたものである。もとより阿彌陀所證の實體に號などのあるべきではない。然るに今經文の「號阿彌陀」とは無名に名を示したものであり、即ち方便法身であることを知らしめたものである。方便法身の故に阿彌陀即是光壽相即の報身の覺體、眞實智惠無爲法身である。これを名號とすると一切萬

德悉くこの中に融攝せられ、衆生の願行因果總攝せざるものはない。その名號を體よりいへば法體盡十方無碍光如來である。かやうに名體不二相即を阿彌陀と號したものである。かうした妙體相であるから因人の説明を超えてゐる。そのため下に至つて佛自らその名義を開顯せられたのである。

『法事讚』に「佛號彌陀、常說法極樂衆障自亡、衆等回心願生彼」とある。この釋相は、經文標正報の一段に於て常說法をもつて彌陀萬德のすべてを代表せしめてゐるのであるが、或は光明、或は相好をもつて代表せしめてはとも考へられる。しかし、說法をもつてしたことは極樂の主莊嚴は眞報身たることを顯はすためである。

『安樂集』上に明三身三土義の條下に於ては、寶性論の報身五種相を引用してゐる。その第一が說法相である。この寶性論の所明は法身に對する報身の相を説示したものである。大體法身は無色無形不說法身である。密教に於て法身說法を立てゝゐるこの法身相に對して報身相を顯はすために說法相を用ひたものである。この『寶性論』の釋を

『安樂集』が採用して三身三土義を立てたものである。本經に於ても略して彌陀佛を標するに說法相を擧げてその報身たることを示したのである。また說法は彌陀の別德たることを示すためである。『大經』東方偈に「梵聲猶雷震、八音暢妙響」



と説いた。或は智慧段に於て「大音宣布一切世界化衆生不」とある。又『大方等大雲經』四に「於此西方有一世界名曰安樂其土有佛號無量壽今現在世光闡正法」と彌陀説法の相を説いてゐる。蓋し大雲經は經典史上問題のある經典である更に密教に於ては五智五方佛説の中彌陀を妙觀察智に配列してゐる。しかして妙觀察智は佛説法の智慧をいつたものである。かやうに大經等に於て説法相をもつて彌陀の別相としたところによつて本經もまたその別徳を顯はされたものである。

それでは説法の内容はいかなるものであらうか、異譯小經には甚深微妙の法を宣説すと説いてゐる。即ち眞如一實功德寶海の名號法である。

かやうにして本經文の顯示するところの有世界の三字は眞土有佛は眞佛を示したものである。この眞佛眞土は光壽兩願の成就であり、號阿彌陀は第十七願の名號成就であり、今現在説法は明に本願の大因と滅度の大果を成就せる相である。更に名義段について概観したい。經文「舍利弗彼佛光明乃至號爲阿彌陀」とあるが、これは彌陀の名義について先に光明を出し、後に壽命に約したものである。光壽もとより攝化の大本、衆生證入の極處、この二徳でもつて彌陀の萬徳を代表せしめたものである。だから本經所明の依正主伴種々莊嚴を全ふじて光壽二徳をも

つて彌陀の名義を示したものである。玄奘譯には壽命を先にし光明を後に明したものは體用次第である。什譯には光明を先とし壽命を後に明してゐる。これは恐らく譯者の意樂にもよることだらうが、現行の梵本では序篇に言及したやうに完全な梵本とは断定できぬであらうが壽命だけ明して光明には言及してゐない。それはともかくとして什譯本經の光壽の次第は恐らく因願の次第を参照したものであらう。また、攝化の大本としては破闍の用ある光明を先とせられたものであらう。

古哲この光壽二徳をもつて名義を説くといふ問題について詳密なる分別を試みてゐる。展持鈔、淨信院錄、勞謙錄、惠空錄その他要はこの無量光は横邊十方の徳相、無量壽は豎徹三世の眞證であつて、壽體より光明をはなち衆生攝化のために破闍滿願し、眞佛土に往生せしめて、本佛光壽の徳に冥じ、主伴不二の妙證を得せしむるところに、彌陀名義の別徳がある。而も光壽無量をもつて彌陀の別徳とする所以のものは機法一體の光壽であるからである。諸佛の自證もまた光壽共に無量ではあらうが、彌陀にかぎつては自證を全ふじて利他し、自證の光壽を全ふじて及其人民の利他の別用がある。本經文の構想に於ても佛自ら名義を開説せられたところに、そこに機法一體の別徳を顯はし攝化の大用、主伴不二の眞證を開演せられたものである。



翻て、大經十二光と本經所明の光壽無量の交渉について一言したい。『弊帝録』に「今文言無量者十二光之初也、照十方國者無邊光也、無所障礙者無礙光也、此中無量之義可爲親名、唐經別言無量光佛、故十二之中此初三光攝餘光者、無量爲體、無邊爲相、無礙爲用、三大統諸德故、無量爲體者、般若體性無始無終而無限量爲常德、等と配釋してゐる。先哲或は贅し或は贅せず異論にわたつてゐる。蓋し、『弊帝録』の配釋は三經相望した上のきはめて自然な考へ方だらう。

次に光壽二無量の釋については先哲の諸録に明示されてゐるがたゞ一つの問題は本經文相に於て、壽命説に及其人民とあるが、光明にはその徒衆に及ばないといふことである。『法事讚甄解』六によると、眞報智壽無量全是無量光體、既說同壽命、光明雖不顯義具何疑乃至是知光德不及伴者示廣門差別、壽德兼人民乃彰略門平等廣略相入共不可思議といつてゐる。或説によれば、光明の徒衆に及ばざるものは主伴差別の廣門であるからである。即ち大經の「諸聲聞衆身光一尋、菩薩光明照百由旬」とあるを例證としてゐる。壽命に於ては廣門であつても主伴同じく無量壽である。既に眷屬長壽の願に酬報するものである。眷屬の無量壽を誓ふことそのことは廣門である。よつて經文當相は主伴共に無量壽と顯はすものであら

うと論じてゐる。兩説相俟つて完璧を期すべきである。源信和尚『略記』の説まことに當を得たものと欣仰する。光壽の名義『小經紀聞』に微細の詳説がある參考されたし。

## 五 往生正因論

經文に「舍利弗、不可以少善根、福德因緣、得生彼國」

一、智者——經疏には一日七日の念佛を臨終の念佛と解し、臨終念佛は臨終猛利の心をもつて修する念佛であるから、用心厚きものゝ念佛といはれる。この念佛こそ多善根であつて、往生の正因となるが、平生猛利ならざる心をもつて修する念佛は、用心薄きものであるから往生不可能だといはれた。

二、窺基——經疏に於て、放逸懈怠のものゝ稱念は少善根の故に往生できぬ。三業相應の善をもつて稱名念佛する人は多善根の故に往生できる。また『通贊疏』には微少の善根を少善根とし、一日七日精進勸學をもつて多善根とした。

三、元曉——經疏に菩提心のある念佛は少善根であり、菩提心のない念佛は少善根であるとした。



四、智圓——經疏に等閑の心で往生を欣び、散亂心に住しての念佛は少善根であり、一日七日と期限を立て要期して念佛すれば多善根である。

五、元照——經疏に彌陀の名號を多善根とし、彌陀名號以外のものを悉く少善根とした。希深の經記は全くこの義と同じ。

六、性澄——經疏に正信と廻向と發願の三條件を圓具して、往生を願求するものは大善根であるから往生を得、この三を圓具しないものは少善根だから往生を得ないとした。

七、雲棲——經疏に持名は善中の善、福中の福、菩提心を發して彼國に生ずるの大因縁なりといふ。

八、智旭——經疏に、聲聞緣覺所修の善根は少善根であり、人天有漏の福業は少福德である。この少善根少福德には往生を得ず。信願して名號を執持すれば一聲中多善根福德を具するから往生を得るとした。

九、慈藏——經記に安樂國は大心の所生にして小心の不得生である。二乘小心の人の修する善根を少善根とし、大乘の根機の修するところの善根を大善根としたりしい。

十、圓測——經疏に解脱分を種えたる善根を大善根とし、未だ種えないものを少善根とすとしたやうである。

十一、僧肇——經疏には無反省な放逸生活の念佛を少善根とし、持戒、誦經、禮拜、多念佛、行檀布施を多善根としたと傳へられてゐる。

十二、仁岳——經疏には、散善を小善根とし、定善を多善根としたといふことが古徳によつて傳へられてゐる。

八、九、十、十一、十二の諸師の經疏散逸、慧慧の『私集鈔』、惠空の『義要』、慧雲の『甲午記』参照。

吉水は『選擇集』襄陽石經の文を引證し、『化卷』にもまた靈芝の疏によつて引證せられてゐる。『行卷』、『愚禿鈔』には多少等の三義を述べられてゐる。終南は『法事讚』に「極樂無爲涅槃界、隨緣雜染恐難生、故使如來選要法、教念彌陀專復專」と釋されてゐる。これ即ち廢立の經意を顯開せられ、隨緣雜染恐難生とまさしく、一切諸行は眞土の正因に非ることを教示せられたものである。『唯信鈔文意』に「極樂無爲涅槃界といふは、極樂とまうすはかの安樂淨土なり、よろづのたのしみつねにして、くるしみまじはらざるなり、かのくにをば安養といへり、曇鸞和尚はほめたてまつりて安養とまうすとのたまへり、また論には蓮華藏世界ともいへり、無爲ともい



へり、涅槃界といふは無明のまとひをひるがへして無上覺をさとするなり等と廣説せられた。ところが「恐難生」の釋文について西鎮二家の異議がある。鎮西は元來二機一土を高調し、諸行往生を許容してゐる。西山は一機一土を強張するから、難の一字は絶無の義であつて、千中無一として諸行往生を許容しない。この兩家の異議のよつて來る原由は、土に眞假を辨別しないところにある。然るに、今家は土にはつきり眞假を辨別して、隨縁の諸行といへどもこれを化土に對望すると往生を許容する。蓋し、眞土に望むれば所廢の諸行であるから、その往生は斷じて許容しないのである。宗家の「恐難生」とは眞土に望めて廢捨したものである。經文には「不可得生」とあるのを宗家は「恐難生」と釋せられたのであるから、難は全く不生の意味を表顯したものであることは明白である。もとより涅槃界は眞無爲の境地であるから、凡夫有漏の善根をもつてしては不可得生なりと廢捨し、その眞土に生ずる正因はまさしく「使如來選要法」である。こゝに於て唯だ宗家の釋こそ經意の深底を探り得たものだと思はねばならぬ。

然るに先哲の間に不可得生の文顯説に通ずるや否やの異論がある。その或る説によれば、この簡非の文は隱顯に通すべきである。而して顯説についてみると、

諸行の因は二十願の自力念佛の所入としての化土には不可得生であるとの所説である。この説は、化土の理解に充分でない點がある。即ち元來化土なるものは修因に相當した果の優降が含まれてゐる筈である。觀經の顯説當分は却て諸行は上六品に位し、念佛は下三品に位してゐる。而もともに化土の業因である。かうした經意を窺つても前の説は穩當ではない。更に不可得生の經文は眞土に局られたものだとする説もある。「聖淨決」「甄解」などの所説はそれである。この所説はかへつてはつきりしたところがあつて、相承の深意に徹したやうにみえる。元祖の『小經釋』によつても少善根とは觀經の定散二善のことであつてそれを不可得生と判せられてゐる。そこに行體そのもの、廢立を意圖せられたものである。即ち眞土に望めて諸行不生とこれを廢し、弘願念佛の行體をもつて生因と開示せられたものである。また、宗祖の嫌貶開示等の御釋を窺つても、この消息がはつきり出てゐる。

大體釋家祖釋によれば、眞土を中心とし、これを豫想して、諸行を不可得生と嫌貶し、弘願念佛をもつて即生彼國と顯示せられたものである。是れ即ち佛能説の上の行體廢立である。ところが、それについて能聞の機が問題となるので、若し漸機



であれば、本願の嘉號にさへ自力の執をかけて、そこに所謂眞門念佛なるものを生み出すのである。この消息を釋顯せられたものが即ち『化卷』の嫌貶開示の意趣である。だからして、本經の所説は觀經のそれと異つて、唯眞弘願法である。がその説相が寛容であるために機漸からして眞門方便を成せしめることになるのである。この點注意を要する。

さて、往生の正因については經文「舍利弗若有善男子乃至一心不亂」がその開示である。かの觀經下三品の念佛に隱顯あるとすれば、それに准知してこの經文にもまた隱顯があるとせねばならぬ。その隱とは十八願の行信、顯とは眞門方便の行信である。隱顯のこと既に宗體論の條下で概觀したのであるが、重ねてこの問題について更めて隱顯論にふれてみよう。

觀經の構想は諸行念佛二法を立てゝあるから、直ちに隱顯のあることが窺はれるが、本經はたゞ念佛一法であるために、直ちに隱顯あることは窺ひがたい。だから、觀經下三品の念佛に隱顯あるところから准知するのである。即ち本經は觀經の附屬を承けて、定散諸機に對し相對應立して念佛門に誘引するものである。それがたとひ念佛門に入り切つてもなほ本願の嘉號を己が善根として至心回向する

機がある。かの觀經の機が今經の念佛諸行廢立の深意を聞いて、既に諸行の體を廢捨するに吝でないのだが、なほいまだ諸行の執見を脱却しないためにこゝに自力執心にほだされた自力念佛の執持がなほ殘滓としてのこる。こゝが即ち眞門顯説を成ずる所以である。

更に『化卷』の御釋嫌貶開示と元照疏引用の釋によると本經に於て名號を多善根といふ擬態で表現しようとしてせられた意圖は、善根意識の捨てきれないものに妥協したとでもいふところに眞門顯説を成ずる所以も存する。或は本經に來迎を説示された。十九願には必然的に來迎を説示した。二十願の機もまた自力不定であつて、自ら臨終來迎を期してゐる。かくて心不顛倒を得るのである。かうした經文の説相もまた眞門顯説を成ずる所以でもある。

そこで『化卷』に「開示善本徳本眞門、勵自力一心、勸難思往生」とあるが、名號法は眞實弘願ではあるが機失より眞門自力を成ずるものである。よつて、本經は、教頓機漸といはれてゐる。そして、その機に應じて機功を遮せざる説相をもそのうちに藏されてゐる。こゝに本經の説相の妙趣が感佩されるのである。

「執持名號」この經文はいふまでもなく、觀經附屬の持無量壽佛名を承けたもので



ある。執持には體相あつて即ち信と稱とに通ずるものである。若し體に約すれば心に信受することを執持といつたものである。『化卷』本の「經言執持亦言一心、執言彰心堅牢而不移轉也、持言名不散不失也」とは一心不亂をもつて執持を釋したものであるが、まさしく體に約した釋相である。若し相に約すれば口に稱名することである。觀經附屬の持の言は正しく相の稱名である。終南は「一向專念彌陀佛名」と釋し、吉水の『私記』には「執持名號者此正修念佛也」と釋せられたものはこの場合にあてはまる。

經文の組織の上からは、この執持名號は聞說阿彌陀の聞と聯關すると信心のこととなり、一日七日と交渉づければ稱名となるのである。また宗祖の釋相からみると『化卷』本の「執言彰心堅牢」とは隱彰弘願に約し、同孤山疏所引の釋相は顯說の義を顯示されたものである。

次に經言「一心不亂」には支那釋家の間に異論がある。元照は理事の念佛又は定心念佛散心念佛とした。株宏は無相理觀の一心とした。大體他師釋家の共通せる意見は理事定散の念佛と取扱つたやうである。これに對して終南は『法事讚』下に「七日七夜心無間長時起行倍皆然」と釋して、初は別時念佛に約し、後は長時念佛

に約して顯はされたものである。『散善義』に「上盡百年下至一日七日、一心專念彌陀名號定得往生必無疑也」と釋し、元祖『小經釋』に「一日七日意兼一生乃至十聲一聲」との釋は若一日若二日の若の經言は時節の長短、修行の久近は問ふところでないといふ彰はされたものだとの明判である。隱彰についていへば第十八願の乃至十念であるから、上は一形下は若一日若七日更に時節の久近をえらばない他力易行易修の念佛である。

されば『化卷』本に「一之言者名無二之言也、心之言者名眞實也」との釋は、他力の信心は無他想問雜の故に無二をもつて一を釋し、一心は凡夫所發の自力所産でなく、如來回向の眞實信心なることを顯はされたものである。不亂といふ經言については機相からいふと不散不失であつて信心不亂失のことであるが、法徳からいふと攝在住心の正受三昧の徳がある。又、若一日等の經文を顯說に約して解釋すると即ち植諸徳本の念佛であつて、本願の嘉號をもつて自の善根とし一日七日策修自勵して、能稱の功を積み來迎を期するところである。

かやうに、經文正修念佛の一段は、善男子等は念佛行者を明し、若一日等は時節の延促を明し、一心不亂は往生の修因を明し、其人臨終等は來迎の益を明し、是人終時



等は行者往生を示し、我見是利等は自證知見をもつて勸信したものである。

凡そ、發心、廻心、願心、といったやうな宗教への發足をあらはす諸の態度は、明かに宗教の原理的超越性を語つてゐて、現實存在の否定超克を示してゐる。さうした態度の究極は既に吾々の意志ではなくて絶對的なる意志である。大體宗教生活特に佛敎生活といふものは佛に根柢をもつてゐてそれに基礎づけられたる生活であつて、而も我々が佛を求めるのではなくて、佛そのものが吾々を求めつゝあるといふことが本質的構造をなすものである。よつて、高次の實在即佛を豫想せずしては、また、無縁の大悲に攝取せられるといふ信仰がなくては眞の宗教生活は成立しないものである。しかしそれが直ちに無爲涅槃の境であり、寂滅爲樂の地だと考へてはならぬ。全く具徳としての基調を與へるものである。

信仰の論理としては、一應、凡夫と佛とののはつきりした區別をつけねばならぬ。凡夫は凡夫であつて佛ではない。無論、救濟の内容としては生佛一如であるといふ原理は決して忘れてはならぬ。即ち直接無媒介の大道の存することを豫想すべきである。といつて、かうした大道は信仰を必然的に要する凡夫の思考範疇を超えたものである。だから、一應、といふ文字によつてこの大道を見逃がしてゐる

のではないことを示さうとしたものである。だが、信仰としては佛と凡夫とは根本的に異格であるとの立場に立たねばならぬ。信仰には凡夫の有限性の限界體験を契機として否定止揚する必要がある。蓋し契機も宿善であり、否定止揚も回向されたものであることはいふまでもない。これが大道の具象化なのである。しかしそれがもとより回向相であるとしても、鬭争、死病、罪惡といった悲痛な現實の經驗が先行し宿善となつて、信心の機縁が開かれるものであらう。

或る基督教神學者の言葉に、隨分思ひ切つたことをいつてゐる。「宗教は人間を罪科と運命の問題から連れ出すものではなくて却つてはつきりその中に導き入れるものである。また人間に人生問題の解決をもたらすものではなく、むしろ人間自身を決定的に解決しがたき謎たらしめる、また、宗教は人間の救濟でも、救濟の發見でもなくむしろ人間の救濟されてゐないことの發見である、かうした言葉からうける感激も、全的に許容してはならぬこともよくわかるが、また感激そのものにも一應うなづけるところもある。

ところが、原始佛敎に於て示された緣起論、その順逆兩觀を媒介として修道せられる道諦、その究竟實現の滅諦、この嚴かな過程には絶對的實在、佛、極樂といったや



うなもの、想定は全くない。また若し、縁起論中に、絶対者などといったものを織り込まれたとすればそれは數論などかはりがない。縁起論の示すところは現實世界の如實相は相依相關の構造に外ならぬといふにある。そこに人生の罪苦の生滅すべき所以の理が存在論的に開示されてゐる。即ち縁起論の眞髓に徹して根本無明の滅に精進するならば一切の滅を實現することが出来る。一切の滅は絶対否定的に涅槃の自覺、佛智の開顯となるであらう。八正道はまさしく實踐的の道法である。これによつて滅實現、佛智開顯がある。凡そかうした原始佛教から、心淨ならば一切は淨、心染ならば一切は染といった風光に接することができやうが、高次の實在とか、救濟の主佛とかいつたものは發見されないであらう。然しこれは思想上のことであり、存在論的反省の上のことである。無明の自覺に徹し、覺路の能統一に立つて生死の境界を解脱するといふのだから、この努力の實踐中に何等かの意味に於て絶対的な高次の實在といつたやうな領域への人格的態度があるべきである。無明を縁として生ずる無常相對の領域に對して、明或は般若によつて生れた覺路の能統一なるものは實踐的意義に於て高次の優越なる立場として自覺されねばならぬ。

原始佛教の理想は單に相對に對する絶対ではない。單に無明に對する明ではない。それは相對と絶対とが否定を通して相即圓融する境地であるべきである。眞に無明の闇を破する無礙光でなければならぬ。だから根本佛教の一切を所統一として包含する能統一たる覺路の實踐は、たしかに高次なる世界を顯現しようとする努力を外にしては考へられない。「無明より明へ」といふ事實は單に轉換とか轉變とかいつたものだけでは生れてこない。立場の跳躍、その飛躍も單なる飛躍ではなく、立場の深さ、包含、豫想といつたものが含まれてゐるものとせねばならぬ。そこで、法にもとづいて存在する世界に立つ衆生と、法自身を觀する高次の世界に立つ佛と、生死流轉の凡夫の立場と、不生不滅の高次にある悲智圓滿の佛陀の立場との一應の區別を觀せねばならぬ。こゝに於て「信爲能入」の意義が生きてくる世界がはつきり出てくるのである。

一切の現存在の罪惡は聖(佛)なるものとの邂逅を外にしては考へられない。深く罪に死するの體驗があるところには必然的に聖なる生に更生せねばおかぬ體驗が成立する。人間最高の努力と期待とが決定的に崩壊するところに必ずやその深底から彌陀の本願があらはれてくる。あらはさうとした人間的な精進から



ではなくて、あらはれねばおかぬ彌陀の本願なのである。八正道といつても、人間からは滅への道諦ではあるが如來よりは如來そのもの、自證の過程である。よつて佛智こそ八正道の積極的内容となるのである。そこに「信」が自らなる貌に於て生れて來る。

最後に宗教は生活を根本的に更生しようと願ひ求むることである。だから、現實を逃避し、文化の創造建設を回避し、單なる寂滅の世界に爲樂しようとする態度でないことは今更論するにも及ばぬ。凡そ眞の超越は眞の内在であり、死は全く生であるべき筈である。こゝに信行の徹底があり、救濟の實化は全く成るのである。宗教にして衆縁所生を根據として一切の絶對の否定を説くならば、それは絶對否定を媒介として妙有の如實相を自覺顯彰の意味に外ならない。そこで、救濟といふ事實も文化の歴史的現實を對象とせずしてはそこに何の意味もないものである。この意味に於て宗教は超越的出世間的であると同時に眞に社會的世間的に動いてゐるもの、地上の生活の内に徹して救濟の理想を實現するものである。

## 後 の こと ば

先輩師友の指導を得て阿彌陀經の諸問題を編んでみたが、さて、更めて讀みなほしてみると實に杜撰なものである。先づ宗師并祖訓の眞意に徹しないこと、先覺の宏績を徒に瀆したこと、讀書について周到な用意を缺いたこと、表現の拙劣なこと、ことに先覺に對しての思はざる非禮等々、ひたすら慚愧あるのみである。蓋し、この悲痛な體驗を縁として、祖釋に親み法味愛樂をつけたいと念願してゐる。



昭和十七年七月十日印刷  
昭和十七年七月十五日發行

阿彌陀經の諸問題

金參圓貳拾錢

不許  
複製

編輯者兼  
發行者

京都市下京區七條猪熊角

龍谷大學

右代表者 增山顯珠

京都市下京區西洞院通七條下

印刷者 (西京七) 内外出版印刷株式會社

代表者 須磨勘兵衛

發行所

京都市下京區七條猪熊角  
振替口座大阪五四三二八番

龍谷大學出版部

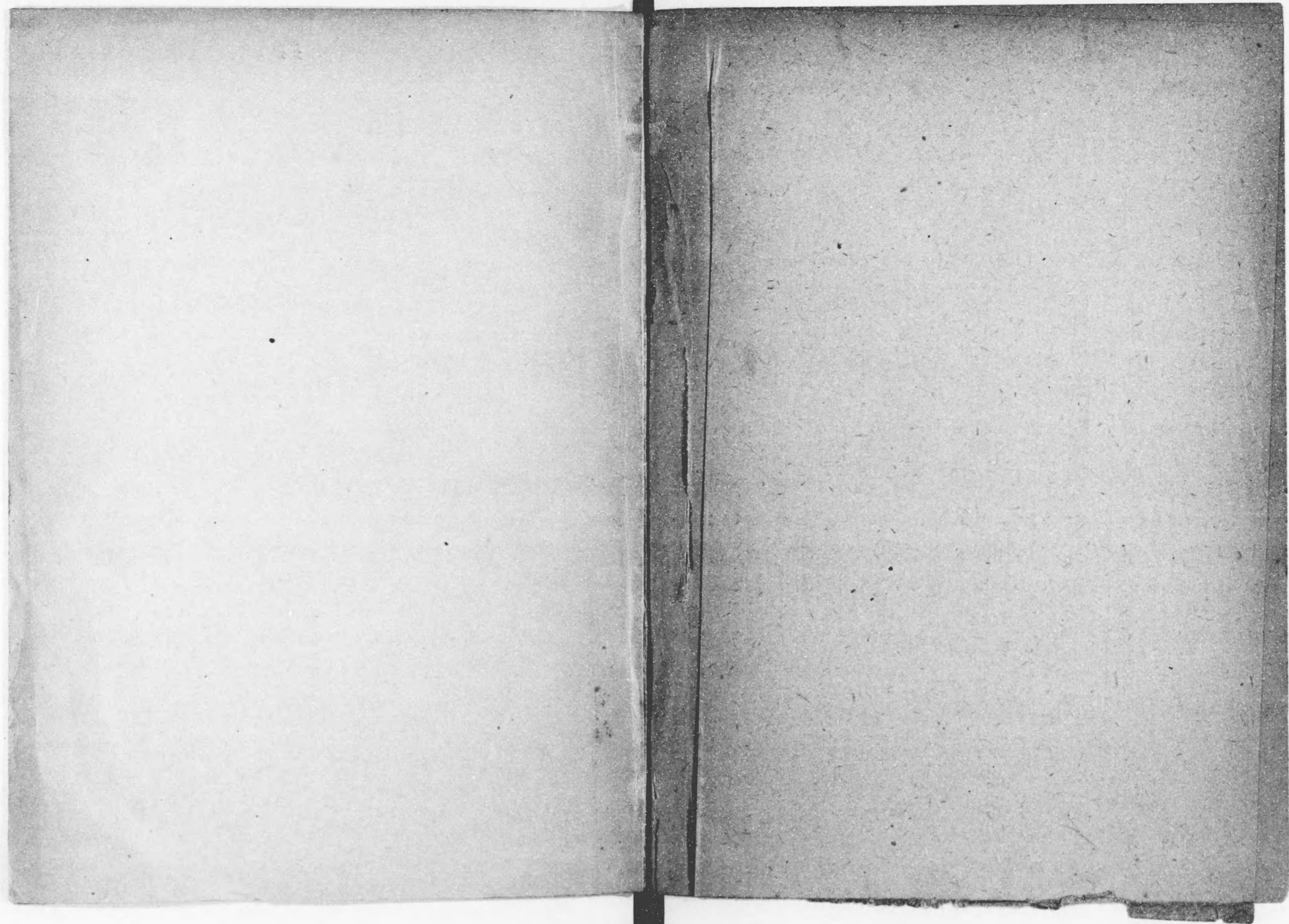
配給元

東京市神田區淡路町二ノ九

日本出版配給株式會社

番八〇〇〇四二號番員會







終

